



伝統マーク
承認番号R2-056



長野県指定
伝統的工芸品
工芸品名
団体名

NAGANO's Traditional Crafts

信州の伝統的工芸品

現代に生きる伝統の技と心



しあわせ信州

長野県産業労働部



信州の伝統的工芸品

経済産業大臣指定 伝統的工芸品

木曾漆器(昭和50年2月17日指定)	3
信州紬(昭和50年2月17日指定)	9
飯山仏壇(昭和50年9月4日指定)	13
松本家具(昭和51年2月26日指定)	17
内山紙(昭和51年6月2日指定)	21
南木曾ろくろ細工(昭和55年3月3日指定)	25
信州打刃物(昭和57年3月5日指定)	29

長野県知事指定 伝統的工芸品

曲物(昭和57年10月21日指定)	33
蘭絵笠(昭和57年10月21日指定)	35
お六櫛(昭和57年10月21日指定)	37
木曾材木工芸品(昭和57年10月21日指定)	39
長野県農民美術(昭和57年10月21日指定)	41
軽井沢彫(昭和58年10月13日指定)	43
秋山木鉢(昭和58年10月13日指定)	45
信州竹細工(昭和58年10月13日指定)	47
信州鋸(昭和58年10月13日指定)	49
あけび蔓細工(昭和59年8月23日指定)	51
信州手描友禅(昭和61年2月20日指定)	53
飯田水引(平成26年11月27日指定)	55
松代焼(平成26年11月27日指定)	57
栄村つぐら(平成26年11月27日指定)	59
信州からまつ家具(平成26年11月27日指定)	61
小沼箒(平成31年3月22日指定)	63
長野県手作り打上花火(平成31年3月22日指定)	65
信州組子細工(平成31年3月22日指定)	67

経済産業大臣指定7品目



木曾漆器



信州紬



飯山仏壇



松本家具



内山紙



南木曾ろくろ細工



信州打刃物



曲物



蘭桵笠



お六櫛



木曾材木工芸品



長野県農民美術



白樺工芸品



軽井沢彫



秋山木鉢



桐下駄



信州竹細工



信州鋸



あけび蔓細工



信州手描友禅



龍溪硯



飯田水引



松代焼



栄村つぐら



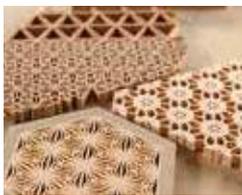
信州からまつ家具



小沼箒



長野県手作り打上花火



信州組子細工

長野県知事指定21品目

信州の伝統的工芸品

木曾漆器

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和50年2月17日指定



木曾漆器の概要

塩尻市(旧榑川村)は、木曾谷を貫く中山道(国道19号)の北の入口に位置し、夏涼しく冬厳寒な気候は、漆を塗る作業環境に良く、豊かな森林は良材を育み、17世紀初頭から400有余年にわたり木曾漆器の伝統技法が受け継がれてきました。

木曾漆器が全国に名を馳せたのは、明治初期に地元から発見された、鉄分を多く含む「錆土さびつち」により、堅牢な漆器を作ることができ

たからです。

木肌の美しさを生かす「木曾春慶きそしゅんけい」、幾層の漆により斑模様を表す「木曾堆朱きそついしゆ」、彩漆で幾何学模様を描く「塗分呂色塗ぬりわけろいろぬり」の三技法をはじめ、沈金・蒔絵など様々な技法・加飾があり、ヒノキ、カツラ、トチなどの良材を木地として、丈夫で使い勝手のよい製品が造られています。若い職人を中心に、現在の生活に適合した新しい木曾漆器が生産されています。

【主要産地】

塩尻市、木曾町、松本市



主な製品

◎座卓



◎漆盆



◎蒔絵盛器



◎座卓



◎漆絵



◎漆木箱



伝統を受け継ぎ、現代に根ざす

木曾漆器の伝統的な技法は、たつぷりと漆を含ませたタンポを使って「型置」し、何層にも彩漆を塗り重ねた「木曾堆朱」、独特の中塗りを施した後、精製彩漆を用いて塗分した「塗分呂色」、木地の木目を生かした「木曾春慶」があります。

また、沈金や蒔絵などの技法を用いた漆製品もあります。

ガラスや金属など異素材への漆の活用や、現代生活に根ざした、漆製品の開発も行い、木曾漆器の素晴らしさを皆様にお伝えできるよう取り組んでいます。



◆ 錆土



◆ 下地塗り



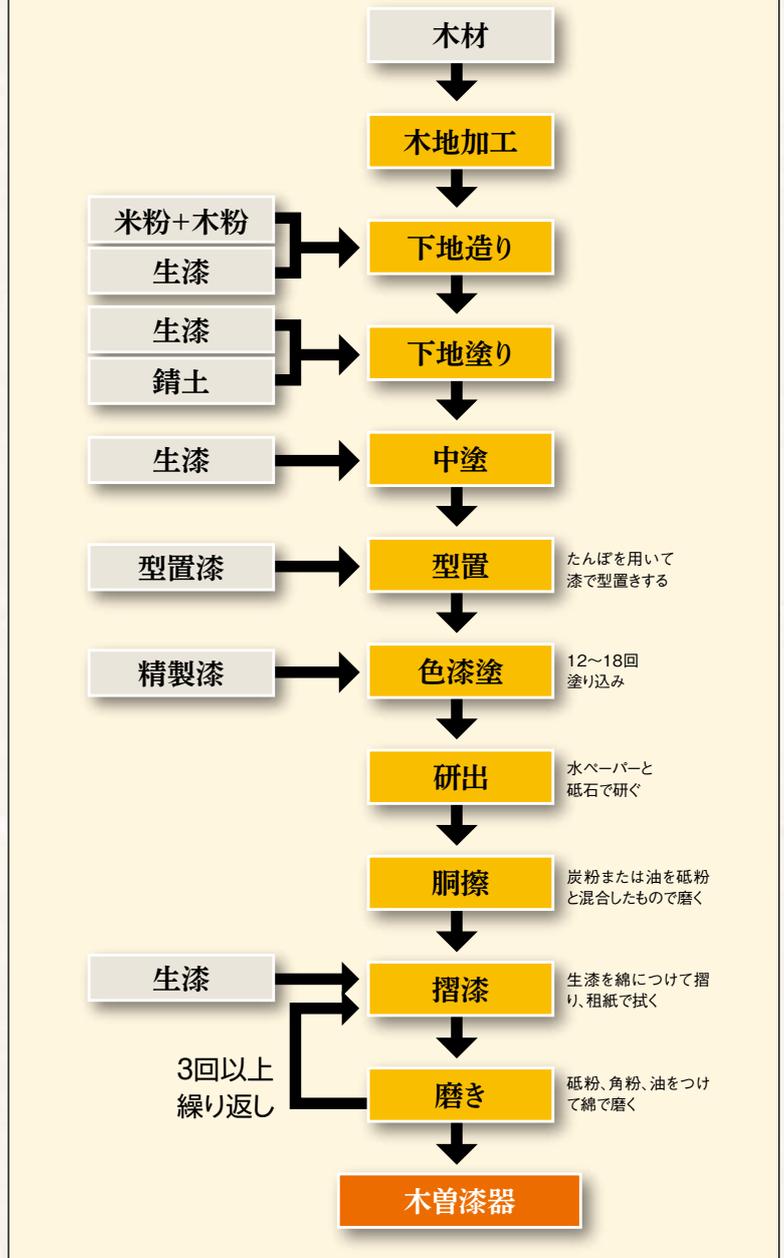
◆ 漆漉し (吉野紙等で漉して、漆の不純物を取り除く)



◆ 型置



【木曾堆朱製造工程】



技 大切な漆を、丁寧に、心を込めて

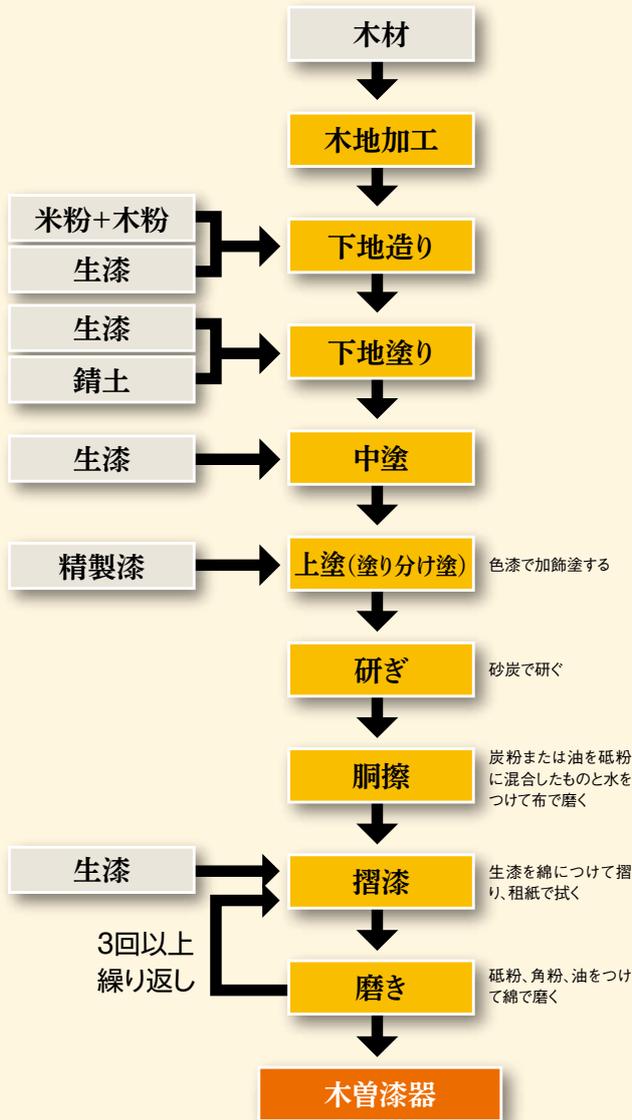
漆は、とても大切なものです。1滴たりとも無駄にしてはいけなと、昔から教え込まれています。

木曾漆器は、木曾ヒノキをはじめとした木曾五木を木地としていることから、他の産地では真似のできない漆器製品を生み出すことができます。

伝統を踏まえつつ、生活の中で使い込んでもらえる漆器を造り続けていきたいと思っています。



【塗分呂色塗製造工程】



◆塗り



◆ふし上げ (漆を塗った面に、浮かびあってきた埃や不純物を取り除く作業)



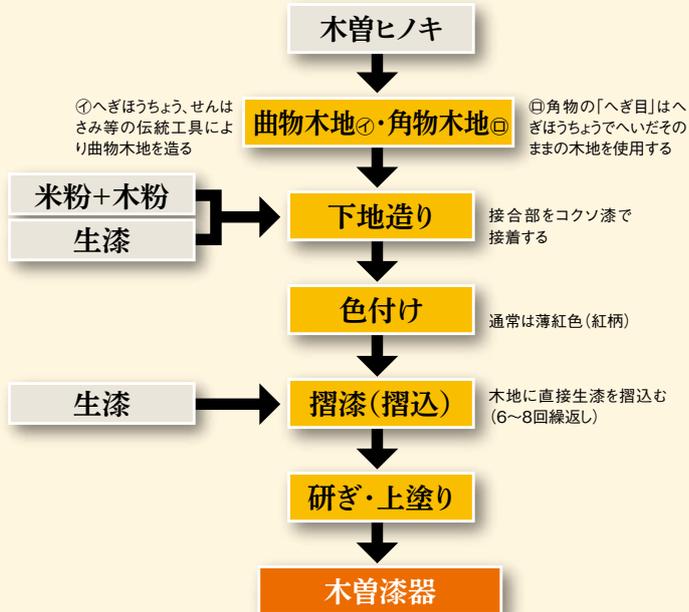
◆磨き



◆研ぎ



【木曾春慶製造工程】



伝統的技法を生かした製品

◎厨子(ZUSHI)



◎漆マグネットボード



◎漆テーブルセット



◎木曾春慶のお椀、箸



◎はまぐり型弁当箱



◎弁当箱



◎うるし食器セット



◎2012年長野県技能五輪・アビリンピック表彰メダル



歴史・沿革

木曾の漆器が歴史に現れるのは、富田町(現在の木曾町福島八沢)にあった竜源寺という寺院の経堂の漆塗り裏面に、「応永元年(1395年)富田町漆師加藤喜左衛門献納」と文字があったと伝えられているのが最初となります。

承応の頃(1652年～1655年)にかけては、木曾平沢(当時は奈良井村平沢)には、十数戸の漆塗業者があったといわれています。木曾谷は、溪谷地帯のため農耕地が少ない反面、木曾ヒノキをはじめとする豊かな恵まれた森林資源を利用した白木細工に漆を塗り、中山道(木曾路)を行きかう旅人を相手にお土産品として作り始めたことがその始まりといわれています。

原材料は、当初自由に伐採さ

れていましたが、宝永5年(1708年)5月以降、五木伐採停止の令が出て事業に一頓挫を来しましたが、代官山村家の庇護により尾州藩に嘆訴して、漆器業者へ毎年「檜物手形」が下付され、相当量の檜材が漆器の木地用として無代伐採の恩恵に浴した記録があります。

約250年前の元禄の頃の平沢の漆器は、専ら実用を主とする板物類として世に聞こえ、木曾物(木曾平沢の特徴)と称されて寛政年間(1789年～1800年)に至っては、京都、大阪、江戸に木曾物取次受売店ができたといわれています。

職人たちは、更に良い品物を求めて当時噂の高かった輪島へと漆塗りの技法を習得するために出かけていきました。

明治の初め頃、奈良井駅の対岸、薪谷沢の山あいから流れ出る鉄分を含み堆積した泥、いわゆる「錆土」という秀れた粘土が発見されました。この「錆土」と漆を混ぜ合わせた下地塗り技法が考案されたことにより、堅牢な堅地漆器*産地となり、日本有数の地位を確立しました。

戦後、飾り棚、衝立、座卓等の漆器家具が多く製造されまし

た。特に、木曾堆朱などによる座卓が人気となり、多くの方が買い求めました。伝統的技法のみならず、沈金、蒔絵などの様々な技法や加飾にも力を入れてきました。金属・ガラスなどへの漆の活用研究も進め、長野冬季五輪・長野県技能五輪・アビリンピックのメダルなどの製作も手がけています。



*堅地漆器 漆器の木地に漆を塗った麻布を張り、さらに上漆をかけて仕上げた上質の漆器。

産地の取組

産地の取り組みを発信

「木曾くらしの工芸館」は、地域を代表する伝統的工芸品「木曾漆器」を軸に、期間毎にテーマを変えて商品展開と販売促進を図っています。



また、販路拡大、伝統技術の継承、人材育成のため、木曾漆器工業協同組合と連携し、文化財修復等事業を実施しています。

木曾漆器祭

毎年6月に、木曾平沢にて開催される大漆器祭。

街並みには180店舗もの店が立ち並び、職人の丹精込めた逸品をはじめ、この日しか出ない製品や蔵出しものが店先に並びます。近年は、若者向けの創作漆器なども商品化され、販売されています。



木曾漆器の中心である、「木曾平沢」は、平成18年「漆工町」として重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

アクセス



●塩尻ICから車で40分 ●伊那ICから車で30分

木曾漆器工業協同組合

〒399-6302 長野県塩尻市木曾平沢2272-7

TEL0264-34-2113 FAX0264-34-2820

e-mail:info@shikkikumiai.com

URL <http://kiso.shikkikumiai.com/>

信州の伝統的工芸品

信州紬

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和50年2月17日指定



信州紬の概要

信州は、古来より養蚕が盛んであり、明治時代以降、基幹産業として製糸業が発展し、岡谷・諏訪、松本、上田等に製糸工場が多く見られました。養蚕農家で、生糸にし難い繭等を真綿にして、それを紡いで織るようになり、養蚕の産地がそのまま織物産地となりました。生糸で作られた絹織物と違い、この紬織物は、江戸時代においては庶民の使用が唯一認められていたもので、

普段着として広く普及しました。

「上田紬」、「松本紬」、「飯田紬」、「伊那紬」など、県内各地で発達した紬を合わせて「信州紬」と呼ばれています。

各地に自生する様々な植物染料を用いた「草木染」による染色が活発であり、また、安曇野地域のくぬぎ林で飼育される山繭(天蚕)は、他の産地にはない独特の風合いを醸し出しています。

【主要産地】

上田市、松本市、
飯田市、長野市、
岡谷市、駒ヶ根市
ほか



歴史・沿革

信州は蚕の国。江戸時代からの伝統を持つ上田地方の「上田紬」をはじめ、松本地方の「松本紬」、飯田地方の「飯田紬」等、各地に素朴な味わいをもつ紬が盛んに生産されており、これらを合わせて信州紬と呼ばれています。

信州は清冽な山国、ここで織られる紬は伝統の素材を近代感覚に生かし、きりりと歯切れのよい美を織りなしてゆきます。

信濃国と呼ばれた遠い昔より絹の国として手織にいそしむ人々は、永い歴史の流れのなかに静かな息づきを続けていました。

江戸時代初期頃より、各藩で

は桑樹を栽培させ、養蚕を奨励しました。紬は屑繭を原材料とじていましたので、原材料生産地がそのまま織物生産地となり得たのです。

寛延3年(1750年)8月紬荷物を京都に送り出したのを皮切りに、宝暦から明和の時代にかけて毎年のように送られています。

春繭が糸にとられ織物となった8月下旬から9月初めにかけて、京都大丸は、紬を求めにわざわざ手代を派遣し、紬荷物は中仙道を京都へと送られてゆきました。

調度貢献明細表によれば、「信濃国は紫草二八〇〇斤を産

して常陸国(茨城県)の三八〇〇斤に次ぐ全国第二位の紫草の産地たり」と記されているように草木染材がいたるところに自生していたことから、草木染、手織の技法が全県にわたって普及したものと考えられます。

昭和の中頃までは、技術保存の名のもとに僅かに続けられていただけでしたが、戦後、細織物の復興が図られ、県を始め市町村の振興策が積極的に推進されてから、県下全域にわたって生産が活発となっていきました。



産地の取組

自然が生み出した独特の色彩

信州紬の特長の一つは、「草木染」にあります。山野に自生する、栗、唐松、小梨、山桜、白樺、イチイなどから染液を煎じ出し、昔ながらの手染めの技術と方法で糸を染めています。「草木染」ならではの深みのある柔らかな色合いを醸し出しています。



手織り体験

草木染をした糸を、1本1本手織機で織り上げていく体験。軽くて柔らかく、しっとりとした、手織紬の手触り、風合いを楽しめます。

手織り体験を通して、信州紬の良さをより多くの方に知ってほしいと思っています。



アクセス



長野県織物工業組合

〒399-4106 長野県駒ヶ根市東町2-29

久保田織染工業(株)内

TEL0265-83-2202 FAX0265-83-2204



◎お財布と櫛ケース



◎ネクタイと襟巻き



地域の特徴を活かして

信州の各地で、それぞれ特徴のある紬を織っています。

特に、各地に自生している植物を用いた「草木染」は、信州紬の特長のひとつです。山々から山野草を採取し、独特の風合いのある染料を作り、染色した「信州紬」の美しさをお楽しみください。



◆ 撚糸



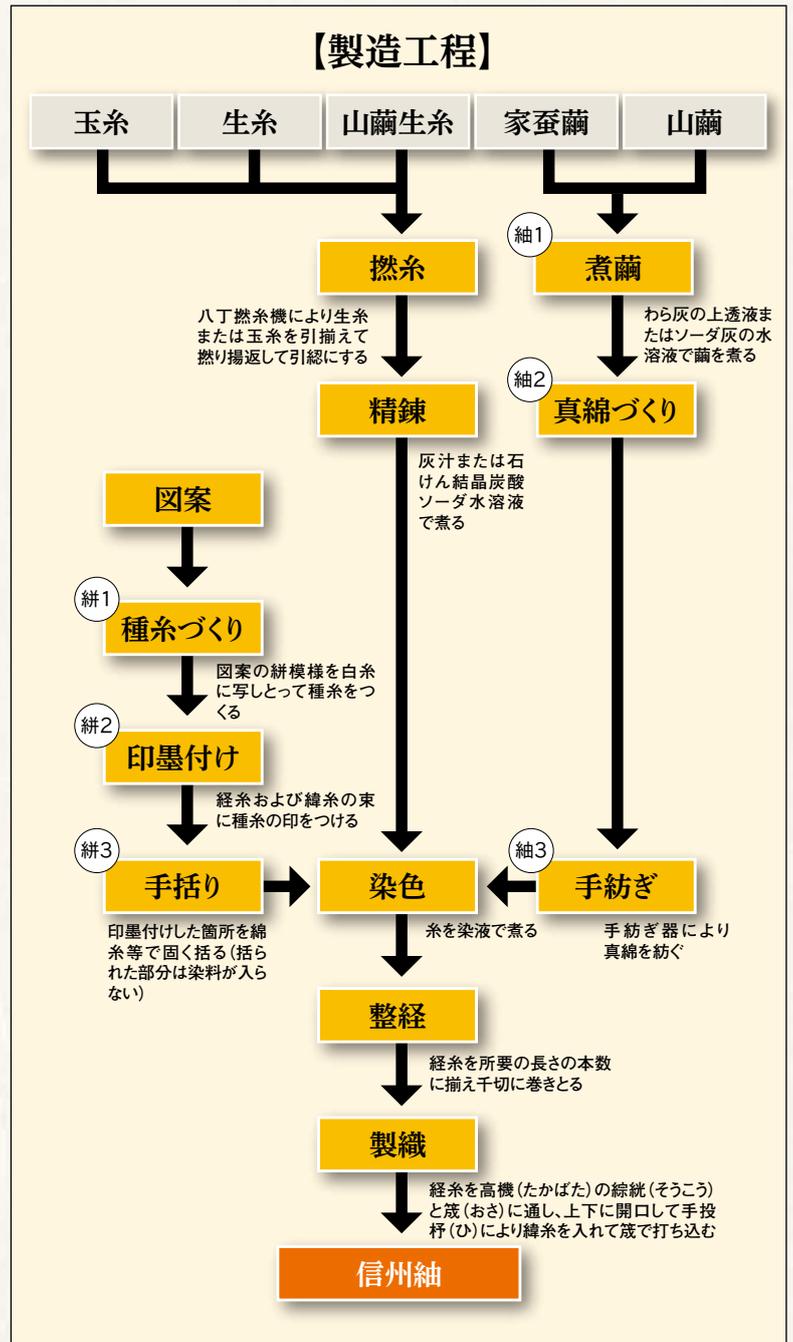
◆ 染色



◆ 整経



◆ 製織



技 職人の技と心

「信州紬」は、信州の女性が、家族のために代々受け継ぎ、織り続けてきた紬です。信州各地の特色を活かしながら、独特の手織り機で一本一本丹精込めて手織りにすることにより、手造りの良さを今に再現しています。



信州の伝統的工芸品

飯山仏壇

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和50年9月4日指定



伝統マーク
承認番号27-309



飯山仏壇の概要

製造される仏壇は、17世紀後半から始まったといわれています。

木地、^{くいでん}宮殿、彫刻、塗装、金具、蒔絵、金箔押し、組立の8工程に大分され、木地にはカツラ、ホオ、スギなどが使用されています。

本組み木地(分解組立が可能な木地製造法)、弓なげし、^{ひじきくみもの}宮殿の肘木組物(分解組立が可能な宮殿)、^{ごふんちまきえ}胡粉盛り蒔絵などの伝統的技法により、特徴ある塗り仏壇を製造しています。

【主要産地】 飯山市



歴史・沿革

飯山市は、天正7年(1579年)上杉謙信が築城し、江戸時代には本多氏の居城となった飯山城の城下町。雪深い北信濃の起点であり、物資の集散地として栄えました。

また、文豪島崎藤村がたびたび訪れ「さすが信州第一の仏教の地」とその代表作の冒頭の一節に著し、「雪国の小京都」と言わしめた寺の町としても知られています。「破戒」のモデルになったといわれる真宗寺、禅寺の古刹として有名な正受庵など、市内には由緒ある寺社が数多く点在します。

地場産業である「飯山仏壇」

は元禄2年(1689年)、甲州から来た寺瀬重高が素地仏壇を手がけたのが始まり。もっとも、室町時代に浄土真宗が北陸から伝えられ、飯山を中心とする北信濃に広く根をおろしていく中、仏壇づくりが行われていったのではないかと考えられています。

飯山仏壇が今日まで発達してきた要因は、(1)仏教信仰のあつい土地柄、(2)城下町政策および寺社政策、(3)木材などの仏壇原材料が地元にあった、(4)漆塗りに最適な清澄な空気と適度な湿気を持つ気象条件に恵まれた、などがあげられます。

飯山仏壇事業協同組合に加盟する仏壇店は現在、愛宕寺町を中心に10社あり、それぞれに

個性あふれる飯山仏壇を製造・販売しています。



産地の取組

技術の伝承を積極的に推進

伝統技術と技能を次世代へつなげるため、技術の伝承を積極的に進めています。

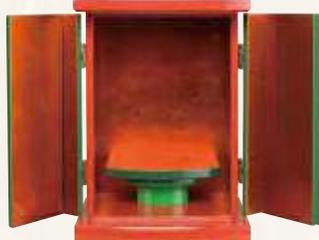
当組合の青年部会として、試作仏壇の製作を実際に行い、技術の伝承、向上を図っています。



技術を活かした製品開発

仏壇の製造技術を活かした製品も、開発しています。

漆塗りの技術を活用し、ペットの供養のための「心の箱」として、販売をしています。



アクセス



●豊田飯山ICから車で15分 ●飯山駅から徒歩15分

飯山仏壇事業協同組合

〒389-2253 長野県飯山市大字飯山1436-1
飯山市伝統産業会館内

TEL0269-62-4026 FAX0269-62-4019
e-mail:butsudan@avis.ne.jp
URL <http://www.avis.ne.jp/~butsudan/>

「肘木組物」で造る宮殿



飯山仏壇独特の技法により、肘木と組物で造られているため、宮殿は分解ができます。

塗装

塗装は、下塗り、研ぎ、中塗り、研ぎを行った上に、上塗り、または漆の色の塗り分けがされます。漆塗りを3回以上繰り返して仕上がりです。

胡粉盛り蒔絵

胡粉盛りは蒔絵に立体感をもたせるために考え出された技法です。

粒子が細かく、白いので盛った後の漆塗り、金粉での仕上げが、きれいに仕上がる特徴をもっています。



宮殿がよく見える弓長押



長押が弓型をしていることから、弓長押と呼ばれ、飯山仏壇独特の「肘木組み」宮殿がよく見えます。



金具

銅または真鍮板に本金鍍金をかけ仕上げをし、装飾と耐久性の両方の目的をもって数多くの金具が使われています。



「本組み」による組立て式の「木地」

木地には、ヒメコマツ、スギ、ヒノキ、ホウ、カツラなどが使用されます。

厚い木をふんだんに使用するので、飯山仏壇は目方が重いといわれています。

これらの木地を使って「本組み」をします。組立式とって、柱と台輪、柱と板が、雄、雌型によりしっかりと組み合わせられていますので、木材の伸縮や、振動による狂いが起こりにくくなっています。

箔押し

仕上げ拭きされた表面に、金箔を置き真綿で拭くと箔に美しい艶がでます。飯山仏壇はこの「艶出し箔押し方法」で金箔を置いているため、いつまでも美しい艶を保つことができます。



組立

すべて手造りで造られる飯山仏壇は、分解し、部品を洗って再塗装する「せんたく」ができるのも大きな特徴。せんたくをすることで新しく蘇り、後世へと代々受け継いで使うことができます。

飯山仏壇の特徴を受け継ぐ伝統的工芸品



【上】現在の住宅事情に合わせ、コンパクトにした仏壇
【右】伝統的な漆塗りだけでなく、木目を活かした仏壇



信州の木材をふんだんに使って

飯山仏壇では、信州の木材をふんだんに使っています。

木地は地元のカツラ、ホウ、スギ、ケヤキなど。地元産の木地を使うからこそ、ふんだんに使えます。



◆木地工程



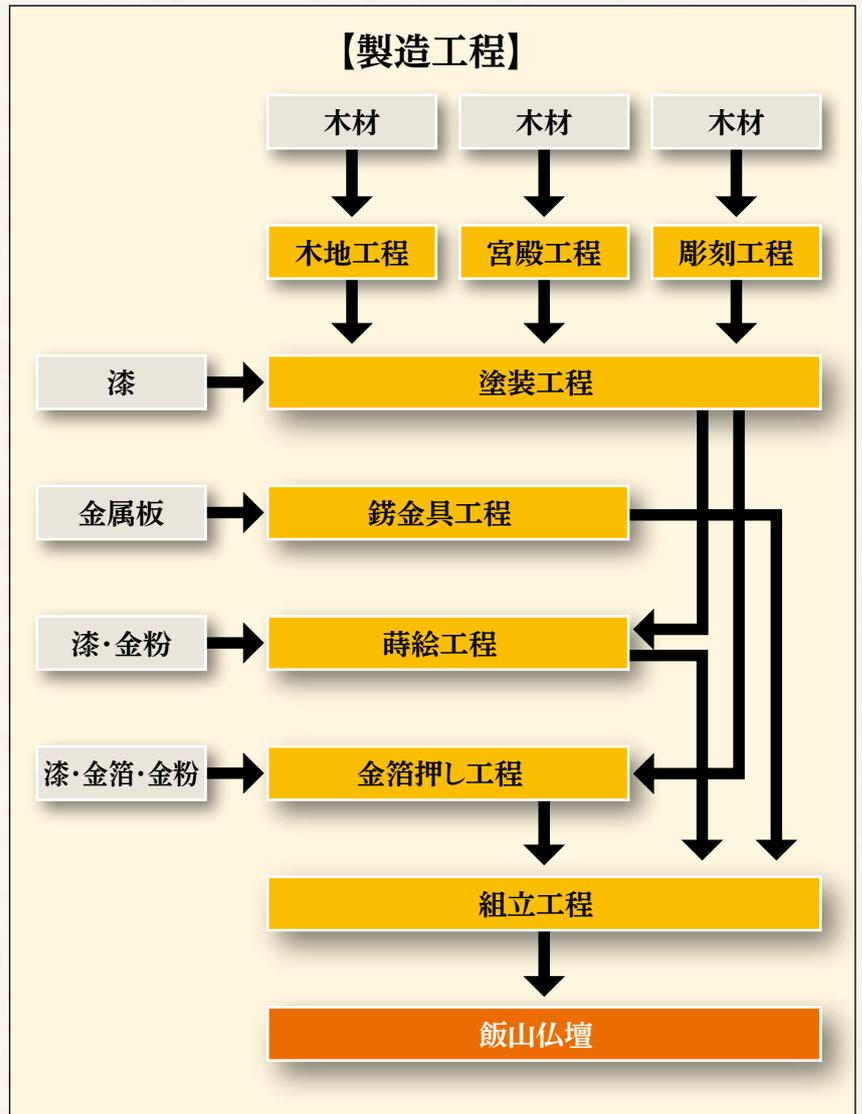
◆宮殿工程



◆彫刻工程



◆かざり 鋳金具工程



技

素材の特徴を生かして丁寧に

信州の木地を生かし、ひとつひとつ丁寧に組み立てます。複雑な宮殿は、釘を使わず、手で組み立てられているため、「せんたく」が可能になります。

ひとつひとつの部品に分解できることから、その部品はしっかりと組み合うよう素材の特徴を生かし、丁寧に加工する必要があります。



信州の伝統的工芸品

松本家具

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和51年2月26日指定



松本家具の概要

17世紀末にはすでに産地形成し、松本藩内の需要に応じていました。ケヤキ、ミズメ、ウダイカンバ等の無垢材を木地として、塗装には漆、柿渋を使用し、筆筒、飾棚、座卓、文机など、伝統的な和家具を生産しています。特徴とするその

堅牢性は、100年以上続いている多種多様の巧緻な組接技法の継承により支えられています。

和家具で培った加工技術^{たんす}を応用して、イス、テーブルなどの洋家具の製造へと発展してきました。

【主要産地】

松本市
塩尻市
木祖村
安曇野市



歴史・沿革

松本家具の起源は古く、天正10年(1582年)松本城を中心に城下町を形成した頃と推定され、松本藩の統制下において城下町の商工業の一つとして発展しました。

その後、元禄10年(1697年)松本藩が行った「元禄十年丑年改諸職人役料調」によると、松本町の諸職人のうち家具に関するものとして指物屋16人、大工46人、木獲屋9人、塗師屋8人、鍛冶屋46人等がみられ、すでに産地を形成していました。

指物技術は建築技術から分化したものと言われているように、当時家具の製造は家大工、船大工、水車大工などの兼業で

ありましたが、上記指物屋、大工等は松本藩域経済圏において武士、町人等の家具の供給者として、その製造に携わっていました。

江戸末期の松本家具で最も代表的なものに帳筆筒があります。この筆筒は当時松本で生産された特別の型をしており、他の松本家具と同様極めて堅牢、剛健です。

これに取付ける鉄金具類の製作者、いわゆる錆職や錠前屋が松本の旧東町、泉町に向けて軒を連ね、明治初期にはその数60軒を数えたと言われていました。また、鉄味を生かした剛健で華麗なその図柄は現代においても賞味されています。

当初は地元とその周辺地域の需要を対象としていたところ、明治時代後期の鉄道の発達により各地へ出荷されるようになりました。

大正4年の記録によると、松本の指物は製造戸数53、さらに昭和13年には製造戸数329に達していました。



産地の取組

民藝運動の一翼として

太平洋戦争後、柳宗悦が松本を訪れ、家具製造の衰退状況を大変惜しまれました。そこで、新作民藝運動の一つとして松本民芸家具の創始者である池田三四郎が、松本家具の製造、復興に取り組み始めました。



池田三四郎と柳宗悦

生活に密着した家具づくり

松本家具は、必要な部分に可能な限り手仕事にて製作しています。濱田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチ…など数々の先達の助力を得ながら、現在に至ります。



バーナード・リーチによる椅子の製作指導

松本家具は、松本地方の伝統的和家具です。複雑な木組の技術によって造られています。

この技術を元に、和家具と洋家具を本格的に結合し、使う人が使い込むほど味わい深い、本物の家具を製造しています。

アクセス



●松本ICから車で10分 ●塩尻北ICから車で20分

松本家具工芸協同組合

〒390-0811 長野県松本市中央4-7-5

TEL0263-36-1597 FAX0263-32-3802

URL http://matsumin.com/40_news/44_info/44_coopo.html

主な製品と伝統的技法を生かした製品

◎中落茶布台



◎朝鮮棚



◎ロッキングチェア



◎ウインザーチェア



◎ラッシュチェア



◎テーブルセット



◎サイドボード



使えば使い込むほどに
味わいが

松本家具は、太平洋戦争終了後、民藝運動の一環として復興しました。伝統的技法を受け継いだ和家具の製造だけでなく、その巧緻な組接技法を生かし、洋家具の製造へと発展していきました。流行を追うのではなく、あくまでも使い手のことを思い、使い込めば使い込むほど味わいのある家具づくりに取り組んでいます。

◆木材



棧積みにより約1年天然乾燥します。中間期に「積み替え」をし乾燥を平均化します。
人工乾燥機で乾燥することにより、現在の生活様式でも利用できる家具の製造を行います。

◆鯨留しやうどめ (木地加工の伝統的技法)



「違胴付留ホゾ差鯨栓接」、通称「鯨留」は、松本家具の堅牢さの代表です。

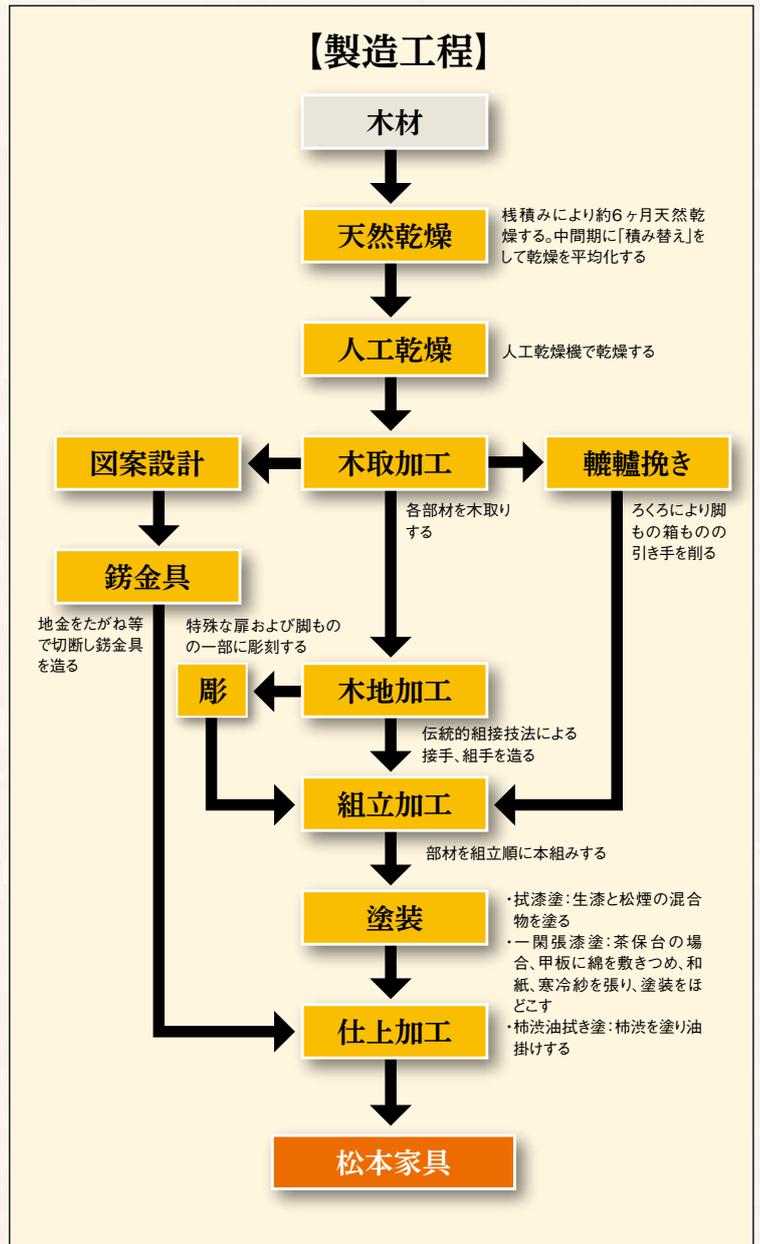


組立時に、「鯨栓」と呼ばれる木片を打ち込むことで、二つの部材がしっかりとつながり、木材の伸縮にも対応できます。

◆蟻棧ありざん (木地加工の伝統的技法)



天板が反ることを防ぐため、蟻棧の技法を使います。ホゾの幅を微妙に変えることにより、接着剤などを使わずに、木と木を接合します。



技 一人ひとりが最終製品に責任を

見えないところも丁寧に、しかし頃合いを持って製造することが真の職人。平刃鉋の扱いから基本を学び、毎日が真剣勝負で製品造りに邁進しています。



職人の思い込めて「銘」を彫る

職人の思い込めて「銘」を彫る自分の一生よりも長く使って欲しい心を込めて製造した家具。「仕事に責任を持つ」という思いも添えて、家具の裏には職人の銘が刻まれています。



信州の伝統的工芸品

内山紙

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和51年6月2日指定



伝統マーク
承認番号27-314



内山紙の概要

江戸時代初期の寛文元年(1661年)に、美濃で製法を身につけた職人が自家で紙を漉いたのが始まりとされ、内山紙の名称は、その地名に起因しています。

原料には全て楮こうぞを用いており、洋紙パルプを混入しておらず、強靱で通気性、通光性、保湿力が優れているという特色を持っています。また、製造工程で、雪の上に晒すことによ

り、自然な白さが得られ、丈夫で日焼けしにくく長持ちします。

手漉き和紙として優れた品質の内山紙は、障子紙をはじめ、表具用紙、美術紙など多くの人に愛用されています。また、その特徴を活かして、照明器具など新たな商品開発も行われています。

【主要産地】

飯山市、
野沢温泉村、栄村



歴史・沿革

内山紙は江戸時代の寛文元年(1661年)に信濃国高井郡内山村(現在の長野県下高井郡木島平村内山)の萩原喜右エ門が美濃の国で製法を習得して帰郷し、自家で漉いたのが始まりと伝えられています。

原料となる楮は自生していて容易に手に入ったことから、江戸時代には広く奥信濃一帯で紙漉が行われていたようで、宝永三年(1706年)の「信濃国高井郡水内郡郷村高帳」に「紙漉運上銀二十五匁七分一原」という記載があることから江戸中期には紙製造が徴税対象の産業だったことがうかがえます。

奥信濃で紙の製造が普及し

たのは、豪雪地帯として知られる奥信濃一帯の農家の冬季の副業として適していたこと、強靱な障子紙の需要が地元や隣接する越後の国で高く現金収入に結びついたこと、そして内山紙の特徴である楮を雪にさらすために雪が役立つことが挙げられます。

明治時代に入ると製造方法に改良が加えられ、製造工程での動力の導入などが行われます。明治42年には製造1,130戸、販売175戸、原料供給1,354戸で、長野製紙同業組合が設立されました。しかし大量生産の洋紙が普及する中、多大な労力がかかる手漉き製造

は生産効率が悪く転業が相次ぎ、同組合は昭和24年に解散しました。

残った生産者が北信内山紙工業協同組合と高水と紙手すき協同組合を設立し、昭和34年には大同団結し、名称を北信

内山紙工業協同組合と改名しました。

平成15年に現内山紙協同組合に名称変更し、現在に至ります。



産地の取組

自分で漉いた、自分の卒業証書

飯山市の小学校では、内山紙の体験をしています。地域の伝統的工芸品の素晴らしさを実際に体験しています。

その際に、自分で漉いた紙は、卒業証書となり、一生の思い出となっています。



内山紙の素晴らしさを他の分野でも

丈夫でありながら、透光性があることから、照明器具の開発も行っています。

丈夫な内山紙をひも状に練ることにより、内山紙による布状の製品や紐も作ることができます。



和紙照明「TIKUMA」



アクセス



●豊田飯山ICから車で20分

内山紙協同組合

〒389-2322 長野県飯山市大字瑞穂6385
TEL0269-65-2511 FAX0269-65-2601
e-mail info@uchiyama-gami.jp
URL <http://www.uchiyama-gami.jp/>

◎短冊、扇紙、丸紙



◎手帳



◎懐紙と懐紙入



◎札入、メモ帳、カード



◎便箋セット



◎絵手紙用はがき、便箋



◎ブックカバーと団扇



「雪さらし」による
自然な白さ

内山紙は、飯山を中心とした地域で生産されています。楮を原料とした和紙の中でも、その白さは大きな特長となります。

原料の楮を煮て乾燥した後、「雪さらし」を行うことにより、綺麗な白い紙を漉くことができます。

雪の恵みによる、内山紙の味わいのある自然な白さとなります。



雪さらした楮

◆黒皮乾燥



◆漂白前と漂白後の楮



◆漉き



◆紙床付け



【製造工程】



技 微妙な感覚と経験が、手漉き和紙の命

手漉きに使う簀桁も、今は貴重になっています。紙質や紙の大きさにより、様々な簀桁を使い、紙を漉きます。

一枚の紙が均一な厚さとなるように漉くためには、微妙な感覚と経験が必要となります。「紙は気を漉く」と言われるほど、その時の精神状態が反映される作業です。

作業の途中で一瞬でも手を休めると、紙の品質を保てなくなるほど、繊細で厳しい仕事です。



様々な大きさの簀桁

信州の伝統的工芸品

南木曽ろくろ細工

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和55年3月3日指定



南木曽ろくろ細工の概要

18世紀前半には、木地師が南木曽に定着し、名古屋、大阪周辺に木地荷物を出荷していたとされています。江戸時代中期には、白木の挽物がこの地方で生産されていたことが窺われます。

トチ、ケヤキ、セン、カツラなどの広葉樹材をろくろ加工し、拭き漆等をして仕上げしており、天然の美しい木目を生かした実用的な挽物

細工です。

熟練した木地師達が、十分に選び抜いた木材の材質や木味の微細な変化に合わせ、木地鉢、茶びつ、盆、椀などを造り続けています。また、伝統を継承しながら、生活様式の変化や嗜好の多様化に対応した様々な製品を造っています。

【主要産地】 南木曽町



歴史・沿革

南木曽ろくろ細工の起源は明らかではないが、蘭村(現南木曽町)の歴史を記した「勝野文書」に宝永元年(1704年)から享保13年(1728年)の間に、木地師が運上銀を収め、盆・椀等の木地荷物を名古屋・大阪方面に出していたことが記されていることから、江戸時代中期には、白木の挽物がこの地方で生産されていたことが窺われます。

明治初期に至ると、蘭村において木地師、塗物師合わせて15人ほどが椀・盆・茶盆・丸盆等の挽物の製造に従事していたことが、「村誌明細帳(役場文書)」「奥谷文書」等の文献で明らか

かにされていることから、この時代すでに、産地形成していたことが窺われます。また江戸中期にこの地で製造された拭き漆製品が現存していること、及び塗物師がいた事実から、木地の木目等を活かした拭き漆の技術が確立していたと考えられます。

明治中期になると、それまでの手引きろくに代わって水車を動力としたろくろが使われるようになり、技術・生産高とも向上しました。

明治末期には拭き漆の技術向上のため、輪島から漆職人を招いています。(西筑摩郡誌)

昭和初期には茶盆、茶びつ等を中心とする商品の販路が

全国に及ぶようになりました。当時の大福帳をみると白木製品とならんで拭き漆製品が大量に出荷されていたことがうかがわれます。

昭和22年には電動ろくろも導入され能率もいっそう向上しましたが、一方原木が周辺に乏

しくなり、また不便な交通事情等から現状維持の状態がしばらく続きました。しかしながら手づくりの良さ、木製品の味が次第に見直されるようになり、現在に至ります。



産地の取組

原木の森づくり

原木が乏しくなったことから、「南木曽伝統工芸の森」をつくり、植樹をし、原木の育成を進めています。

良い原木を育成することが、良い製品作りにつながることから、木地師が協力して、森の育成に取り組んでいます。



南木曽ろくろ祭り

毎年、11月のはじめに、「ろくろ祭り」を開催しています。

漆畑の山の神に奉納の後、木工芸職人展やろくろ製品の修理なども引き受けています。秋の木曽路の景色と、伝統的工芸品の南木曽ろくろ細工の素晴らしさをお伝えしています。



アクセス



●中津川ICから車で40分 ●飯田ICから車で50分

南木曽ろくろ工芸協同組合

〒399-5302 長野県木曽郡南木曽町吾妻4689

TEL0264-58-2434 FAX0264-58-2434

◎拭き漆の皿と白木製品の椀



◎白木製品のこね鉢



◎どんぐり型の拭き漆椀



◎拭き漆椀



◎茶筒



◎木目を生かした花器



◎ボールペン



◎オーディオ用高級スピーカー



**職人の個性が、
美しい木目の製品を生み出す**

南木曾ろくろは、木目の美しさが命です。原木から素材となる材料をどのように切り出すかは、職人の腕の見せ所です。それぞれの個性、独自の技術から、様々なろくろ製品を生み出しています。

地元のお店をいろいろと回ると、お気に入りのろくろ製品を見つけていただけだと思います。



原木から綺麗な木目を切り出す

◆玉切り



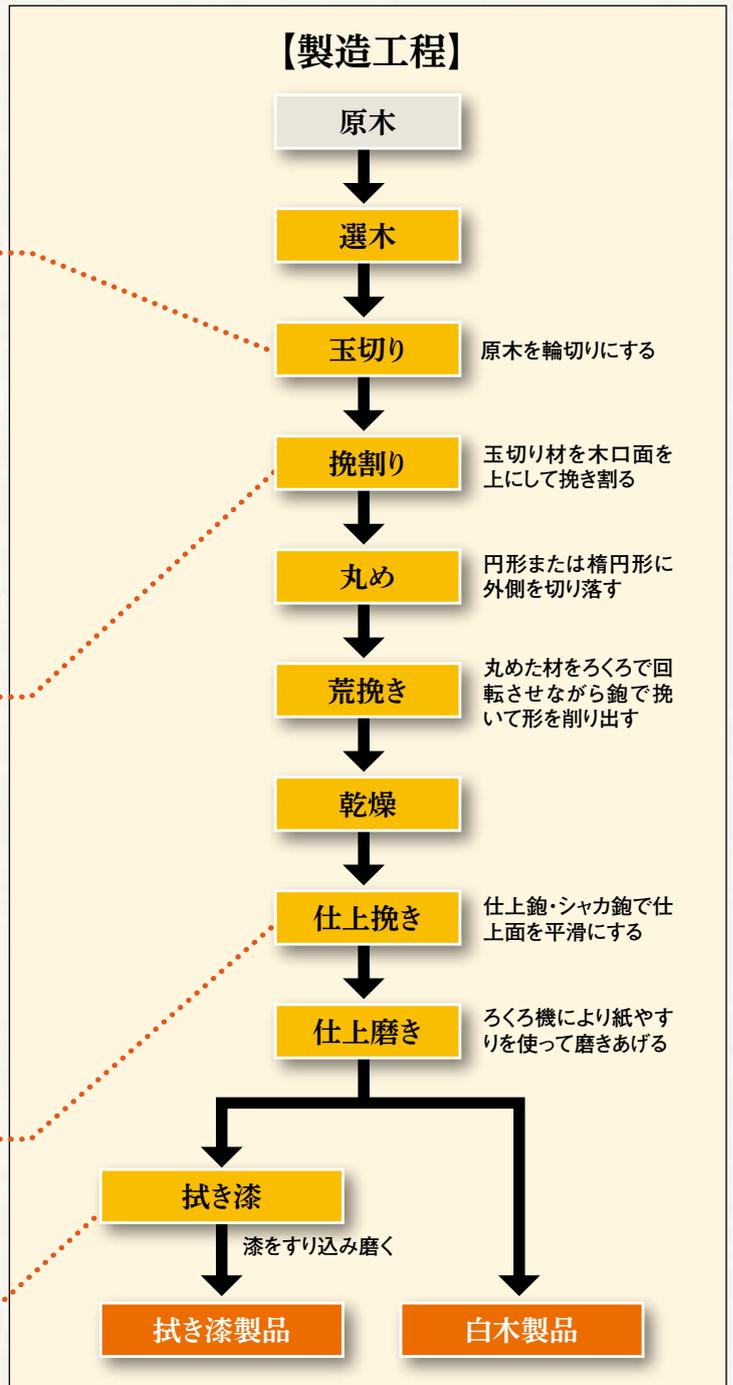
◆挽割り



◆仕上挽き



◆拭き漆



技

鉋の刃を鍛えるところから、製造、販売まで

南木曽ろくろ細工は、ろくろ挽き工程はもちろん、選木、木取りから塗装、鉋の鍛えに至るまでの全作業を一人の熟練職人の手で行い、完成度を高めています。

鉋の刃を、自分で鍛えることができないければ、一人前の職人とは言えません。道具から自分で製作し、ろくろ製品を製造、販売することから、製品に対する思い入れは人一倍あります。



鉋の刃を鍛えている

信州の伝統的工芸品

信州打刃物

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和57年3月5日指定



伝統マーク
承認番号27-315



信州打刃物の概要

16世紀の中期、川中島合戦当時に、この地を往来した刀匠が武具刀剣類の修理を行い、里の人々がこの手伝いを通じて鍛冶の技を習得し、当時農具として必要な鎌を打ったと言われています。

刀匠のもたらした技術は、代々の職人たちに引き継がれ、磨き抜かれており、明治時代の後期には、生産と販売を分業化した問屋が

確立され、全国に販路が拡大しました。

伝統の技による鍛錬、均一な焼き入れ・焼き戻し処理がされており、適度な硬さと粘りがあり、砥石で研ぐことにより長く使用できます。鎌は刃幅が広く強靱であり、柄に差し込む部分を反らせる「芝付け」の加工などによって、使い勝手が良いとの評価を受けています。

【主要産地】 信濃町



歴史・沿革

今をさかのぼること450年前の川中島合戦の当時、武器や刀剣類の修理のために当地へ移住してきた鍛冶職人に里人が鍛冶の業を習い、農具、山林用具作りに生かされました。その後次第に改良を加えながら、弟子から弟子へ、子から孫へとその技法が伝承されていきました。

文化、文政年間(1804年～1829年)柏原村の鍛冶職人専右衛門が、鎌の研究に専念しました。苦心のすえ使い易いように鎌の「コミ」を反らせ、芝付(腰入角)する方法を考案すると共に、薄くした鎌のくるいを防ぐため、「つり」をつけることも考案

しました。

同じ頃、古間の荒井津右衛門が、むずかしい地鉄と鋼の鍛接法の研究をかさね、割鋼から付鋼とし、厚い両刃型から薄くて軽くしかも堅牢で誰にも楽に刃が研げ、やわらかい草も切れる鋭利な薄刃型鎌の製造法を考案しました。

この両者の考案した鎌が現在に受け継がれています。

幕末から明治にかけて、鎌の販売を業とする者が出てくるにしがたい行商から仲買いへと発展し、明治の後期頃には生産と販売とを分業化した専門の間屋が確立しました。明治21年この地に信越線が開通したこと

により更に販売面にも拍車がかかり、全国的に販路が拡大されていきました。

昭和25年頃から動力ハンマー(スプリング)が導入され、差し手(向う鋸)に代り一人でも刃物が打てるようになりました。

また、動力の回転式円砥石やグラインダーが使用されるようになり、生産能率が向上しました。



産地の取組

伝統を受け継ぐ中での、生産効率の向上

信州打刃物の伝統を受け継ぎ、その良さを継承する中でも、生産効率が上がるよう、様々な取り組みを進めています。

機械ハンマーや円砥石などの導入や、プレス刃型による生産工程の削減も図っています。



商標の登録による認知度の向上

伝統ある信州打刃物の商標を「信州鎌」として、平成19年に登録しました。

伝統的工芸品としてだけでなく、商標を登録し、より多くの方に信州打刃物の良さを知っていただきたいと考えています。



アクセス

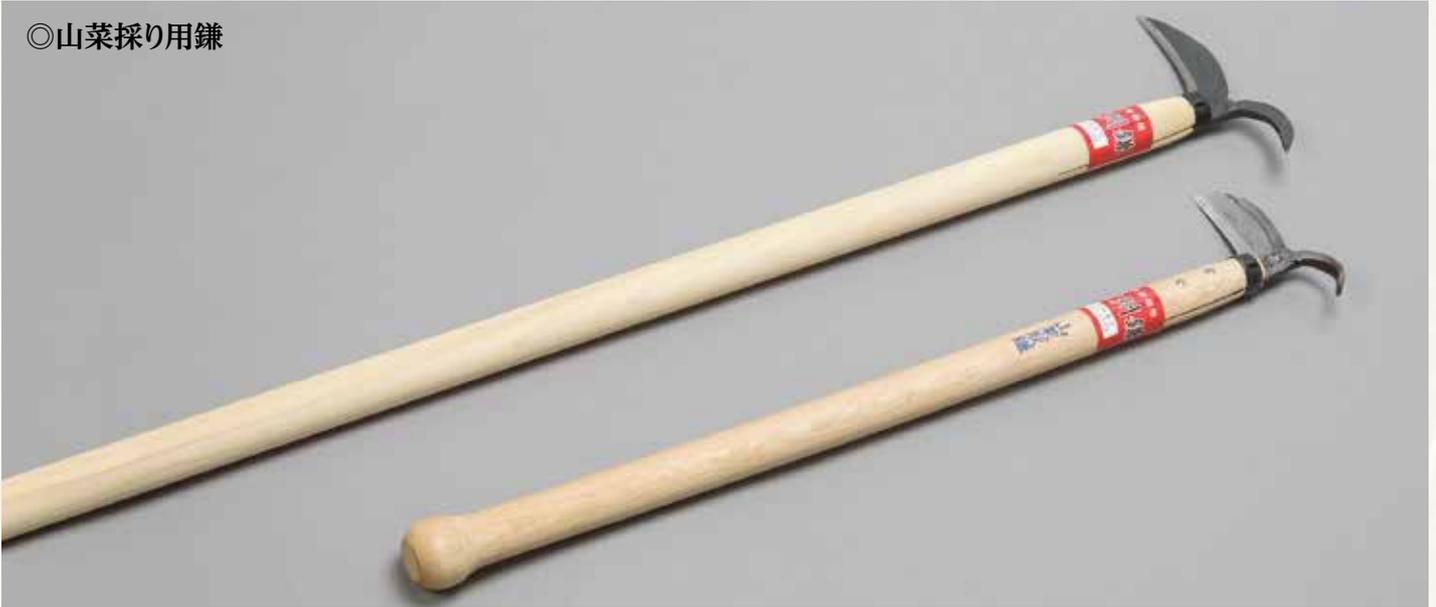


●信濃町ICから車で5分

信州打刃物工業協同組合

〒389-1312 長野県上水内郡信濃町富濃584-1
TEL026-255-6391 FAX026-255-6391
URL <http://www.alps.or.jp/uchihamono/>

◎山菜採り用鎌



◎草刈り用鎌



◎鉞(なた)



◎包丁



◎小刀



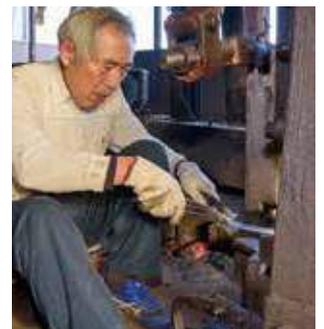
切れ味が良く、耐久性も

信州打刃物は、刀鍛冶の技術を習得したことから始まりました。鎌全体の厚さが1/6という極めて薄い鋼部分はがねが特徴といえます。

草が根元から刈れ、刈り取った草が手元に寄るようにしている「芝付け」加工と、刃を薄くしても手元が狂わないよう刃面を内側に湾曲させる「つり」加工など独特の工夫がなされています。



炉で500℃程度に加熱する



小ならして「つり」と「芝付け」をする

◆腰出し



◆押切り



◆焼き入れ



◆柄すげ



【製造工程】



技

今に息づく伝統の技

様々な機械や材料の工夫などをしていても、伝統の技は引き継がれています。

手と体が覚えた技を用いて、信州打刃物を製造しています。

450有余年続く信州打刃物の、切れ味と使いやすさは、熟練した技から生み出されています。



コミづくり

曲物

長野県指定伝統的工芸品 昭和57年10月21日指定



曲物の概要

曲物は、ヒノキなどの薄板を特殊な技法で円形・楕円形などに曲げて底をつけた容器で、既に奈良時代には日常生活に用いられていたようです。

木曾・奈良井の曲物は400年以上の歴史があります。当初は木曾全体で作られていましたが、現在は奈良井が中心となっています。曲物は、吟味された良質のヒノキやサワラを素材に用いて、木理に沿って「へぎ」、熱湯浸

漬により曲げ加工を行い、そば道具や茶道具などが造られています。

陶器が普及した江戸時代以降も庶民に親しまれ、合成樹脂の製品が広まった現在でも、天然素材で軽くて使いやすいといった長所が再認識されています。良質なヒノキが最上の素材とされ、そのほとんどが樹齢300年以上の「木曾松」を使用しています。

【主要産地】 塩尻市



製造技術

◆曲げ



◆ふた底入れ



【製造工程】



木の性質を知り、加工する

それぞれの木には、固有の性質があります。硬い木、柔らかい木など、木の種類や育ち方でも違いがあります。

これらの木の性質を理解し、曲げたり加工することにより木曽の曲物は生まれてきます。



技 2種類の木の組み合わせ

木曽の曲物は、2種類の木の組み合わせとなります。

蓋板と底板は、吸水性・保湿力が高いサワラです。余分な水分を吸収し、ご飯を美味しく保ちます。

曲げる側板は、木曽ヒノキです。ヒノキは、曲げても木の繊維が伸び、しなやかで丈夫。

尾張藩の御用林として守られてきた木曽は、寒冷地のため木の成長が遅く、木目の詰まった良質の産地として全国的に有名です。

歴史・沿革

寛文年間(1670年頃)、「毛吹草」という諸国の名物を記した冊子に弁当箱、飯桶等が奈良井の曲物として紹介されています。

明治20年頃には、東京のソバ道具屋の依頼により、ソバ道具の木地を生産しました。その後、関東大震災直後大量のソバ道具の注文があり、曲師屋も二十六軒と急増しました。現在も、昔ながらの伝統技術を守っています。



奈良井曲物組合

〒399-6303 長野県塩尻市大字奈良井1352
TEL0264-34-3406 FAX0264-34-3406



信州の伝統的工芸品

あららぎ
蘭 桧 笠

長野県指定伝統的工芸品 昭和57年10月21日指定



あららぎ
蘭桧笠の概要

寛文2年(1662年)に飛騨から技法が伝えられたと言われ、耕地の少ない南木曾町の蘭地区ではまたたく間に主要産業となりました。その当時で、年十数万枚、明治時代の最盛期には百万枚近くの生産量を誇りました。

地元の木曾桧を短冊状に裁断した「ひで」を編組みする手編加工技術により、雨笠、日

よけ笠が造られています。

戦後、生活様式が変化し需要は減りましたが、現在は伝統技法による手造りの良さが見直され、妻籠宿、馬籠宿などの観光客や御嶽山の登山客を中心に、実用笠や装飾品として人気を集めています。

【主要産地】
南木曾町



製造技術

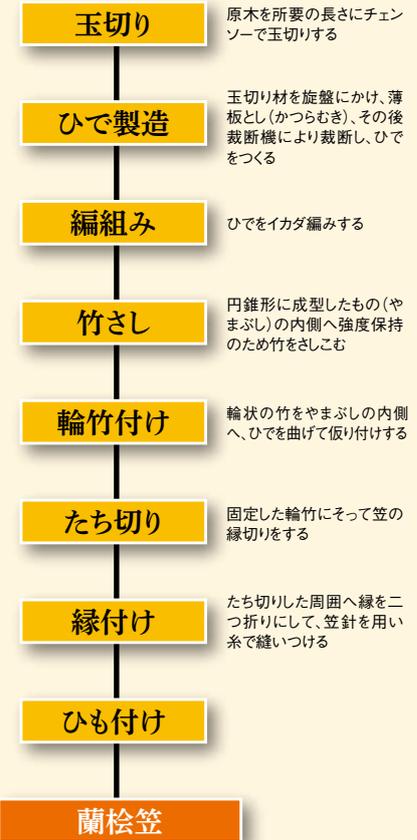
◆編組み(初めの段階)



◆編組み(笠の頭を作る段階)



【製造工程】



製作体験や実演の見学も

国道256号沿線、南木曾町に、「ひのき笠の家」があります。

蘭桧笠や関連商品などが販売されています。また、製作体験や実演の見学も可能(要予約)です。地域の特産品などもあります。



技 笠を編む技術とヒノキの効用を活かして

蘭桧笠の笠を編む技術とヒノキの抗菌性・脱臭効果などを活用し、靴の中敷を開発しました。

新しい分野の商品を開発し、桧笠を編む技術とヒノキの活用分野を広げています。



歴史・沿革

延享2年(1745年)の史料に生産された記録があり、その起源は江戸時代前期と推定されています。

木曾五木の伐採禁止がとけた明治時代に入り生産量が増加し、明治末期には100万蓋近くに達しました。

第二次大戦後、雨笠、日よけ笠としての、桧笠の需要は減少しましたが、現在ではガーデニングなどの実用笠や観光用としても人気があります。



蘭桧笠生産協同組合

〒399-5302

長野県木曾郡南木曾町吾妻3321-1

TEL0264-58-2664 FAX0264-58-2664



信州の伝統的工芸品

お六櫛

長野県指定伝統的工芸品 昭和57年10月21日指定



お六櫛の概要

江戸時代前期に持病の頭痛に悩んでいた村娘お六が、治癒を祈って御嶽山に願掛けをしたところ、ミネバリで櫛を作り髪をとかすようお告げを受けて治ったという伝説が起源であり、300年の伝統があります。

木祖村誌等によると、明治から昭和初期にかけて多いときには、年間180万枚を出荷していた記録があります。現在では木祖村藪原

地区で生産されています。

主にミネバリという硬くて粘りがある樹木を材料に、歯挽き鋸を用いた手挽きの技法により造られています。梳き櫛、解かし櫛、挿櫛、結櫛など種類は多岐にわたり、それぞれに形、大きさ、歯のつけ方などによって様々な名前がつけられています。

【主要産地】 木祖村



製造技術

◆ 歯挽き



◆ 歯擦り(歯通し)



【製造工程】



技 硬く、粘りのあるミネバリを

かつてミネバリは鳥居峠付近に多くあったことから、藪原がお六櫛の主要生産地となったと言われてきました。その材は堅く、斧が折れるという意味から「斧折れ櫛」と呼ばれます。

ミネバリは硬いだけでなく粘りがあり、狂いも出ないことから、お六櫛のような細かい歯の櫛の材としては最適といわれています。

櫛の材料となる櫛木は、2~3年乾燥させた物を使います。



お六櫛体験講座の開講

お六櫛の技術を後世に残すとともに、より多くの方にその製法を体験してもらおうと、お六櫛の体験講座を、子どもから大人まで実施しています。

専用の道具を使いながら、実際にお六櫛を製作します。



歴史・沿革

その歴史は、江戸時代前期にはじまったと推定されます。

木曽の蘭、妻籠(現南木曽町)にかけて木櫛生産が行われていたといい、その後、奈良井(現塩尻市奈良井)、藪原(現木祖村)へと広がり、明治以降は、藪原のみとなり、終戦頃までは300軒程が生産に関係していました。



木祖村お六櫛組合

〒399-6201 長野県木曽郡木祖村藪原1260-1
TEL0264-36-2488 FAX0264-36-2488



信州の伝統的工芸品

木曽材木工芸品

長野県指定伝統的工芸品 昭和57年10月21日指定



木曽材木工芸品の概要

木曽材を使用した木工芸品の製作は、江戸時代以前よりあったと考えられます。木曽漆器や奈良井曲物などは、ここから派生したとされます。

その後、木曽五木(ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコ、コウヤマキ)を素材として、サワラによる桶・樽、ヒノキやコウヤマキの風呂桶、サワラの飯櫃、木味を活かしたネズコ下駄など、

幅広い製品が造られるようになりました。

木曽材は、江戸時代、尾張藩の山林保護から良質の木材として保護・育成され、木工芸品、家庭用品、家具類などの生産が行われており、一般的に水湿に強く、軽くて丈夫であり、主にヒノキ(木曽桧)を使った製品が重宝されています。

【主要産地】

木曽町、上松町、
南木曽町、大桑村
ほか



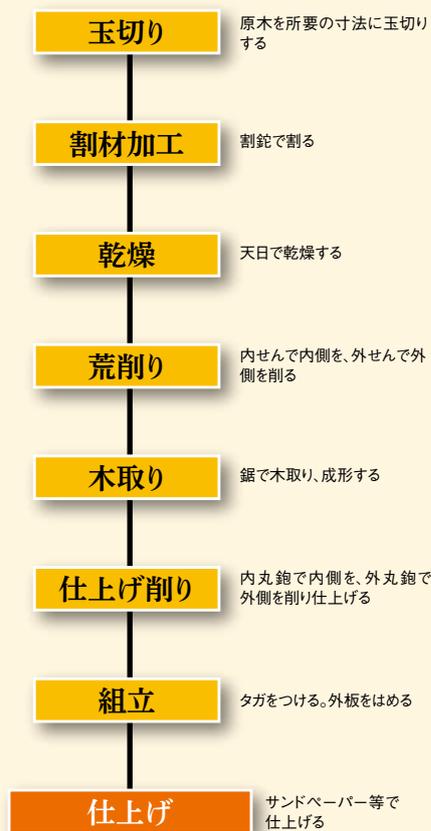
◆荒削り



◆底板の仕上げ削り



【製造工程(桶・樽類)】



日本三大美林「木曽ヒノキ」

「木曽ヒノキ」は、「青森ヒバ」、「秋田スギ」と並び、日本三大美林と呼ばれています。

この「木曽ヒノキ」のほか「サワラ」など、木曽地域で育った材木を使った製品を受け継ぎ生産しています。

かつては、天然素材である木曽ヒノキ、サワラなどの調達は地元で容易にできましたが、現在は、地元でもこれらの材の調達が難しくなっており、これらの天然素材を使用した製品は、大変貴重になってきております。



技 木曽の材を丁寧に、その性質を生かして

それぞれの木には、それぞれの性質があります。向き、不向き、材料の状態など、木曽の材にこだわり、丁寧に仕事に取り組みます。

桶の足の形も、職人によって異なります。同じような製作工程も、それぞれの職人が、その知識と経験を生かして丁寧に、そして、一生懸命に取り組んだ結果であり、それぞれの個性が溢れています。



歴史・沿革

木曽町福島八沢にあった竜源寺の経堂の漆塗り裏面の文字から、すでに応永年間(1400年頃)に、漆器のヒノキ木地を製作していたとされています。その後、サワラ材を使用した桶・樽類を生産、江戸時代には、宿泊者用のたらい等をつくって用に供していました。

明治初期に建具、天井板等にネズコ材を使用、昭和5年からはネズコ下駄も生産されました。

木曽材は、江戸時代の尾張藩の山林保護また現代の国有林管理に至るまで、良質の木材として保護・育成されています。製材の端材をも活用し、木工芸品、家庭用品、家具類等をつくり、現在に至っています。



木曽木材工業協同組合

〒399-5608 長野県木曽郡上松町荻原1579-3
 TEL0264-52-5500 FAX0264-52-5501
 e-mail info@kiso-mokyo.org
 URL <http://www.kiso-mokyo.org/>



信州の伝統的工芸品

長野県農民美術

長野県指定伝統的工芸品 昭和57年10月21日



信州農民美術の概要

大正期の洋画家山本鼎^{かたな}が、ロシアの農民が作った素朴で野趣豊かな美術品に心を打たれ、気候風土の似ている信州の農村で広めるため、小県郡神川村(現上田市)で講習会を開いたのが始まりです。

農村に生まれた木彫手工芸品であり、主に地域の自然や風土をテーマに、ホウ、カツラなどの素材を用いて手彫りにより製作されてい

ます。

信州の豊かな自然、素朴な感性が作り上げる誇り高く伝統に根ざした作品は、芸術性の高い美術工芸品から人々の好みや生活様式を反映した室内装飾品、家具調度、小物、アクセサリまで幅広く、多くの人々に親しまれています。

【主要産地】

上田市、
東御市ほか



◆手彫り彫刻



【製造工程】



🗨️ 鋏を持つ手に、彫刻刀を持ち

それまで鋏を持っていた手に、彫刻刀を持ち、農閑期に製作活動が始まりました。

当初は、その名の通り、農民が副業として取り組みました。後に、専業として製作に携わるようになりました。



初期農民美術 [大正時代から昭和初期]
(上田市立美術館蔵)

歴史・沿革

大正8年、北欧やロシアの木彫手芸工芸品に心打たれた洋画家山本鼎^{かたね}が、神川村(現上田市)で講習を行ったのが農民美術の発祥となりました。

日本の著名な画家、彫刻家の協力で作られたサンプルをもとに製作を開始。その後、作品は北欧の模倣から郷土の風土に合ったものや、都会人の好みに合ったものに移り変わっていきました。

現在では、室内装飾品、装身具、実用品等幅広くつくられています。



初期農民美術 [大正時代から昭和初期]
(上田市立美術館蔵)

🔪 技 大胆な彫り、素朴な、地域色溢れる作品

農民講習から全国に広まった農民美術。下絵はあるものの、頭の中のイメージをもとに大胆に思い切りよく彫り進みます。出来上がった作品は素朴さの中にも、各地の風土や人柄、伝統が息づく作品となっています。



長野県農民美術連合会

〒386-0005 長野県上田市古里114-18
TEL0268-24-2304 FAX0268-24-2304



信州の伝統的工芸品

軽井沢彫

長野県指定伝統的工芸品 昭和58年10月13日指定



軽井沢彫の概要

1888(明治21)年、宣教師アレキサンダー・クロフト・ショーが軽井沢で初めて別荘を建てました。その後、多くの外国人宣教師・外交官が別荘を持つようになり、家具の需要が急増しました。1908(明治41)年には、2軒の彫刻家具を製造・販売する店が開業しました。

当初は日光彫の職人を招いて、外国人別荘用の彫刻家具の製造を始め、その後日本の象徴である桜彫を取り入れ、満開の桜と周辺の

星打ちの独創的なデザインが好評を得ました。その後、日本人にも広く受け入れられるようになりました。

テーブル、イス、タンス、食器棚、サイドボード、鏡台、ベッドなどの洋家具を中心に発展してきており、伝統的工芸技法と家具のデザイン性向上に努め、新しい取組にも挑戦し続けています。

【主要産地】 軽井沢町



製造技術

◆仕上げ彫り



◆星打ち (製品によっては、仕上げ彫りの一環として実施します)



【製造工程】



西洋と東洋の融合

明治期頃、西洋では木彫のある家具が主流で、それに応じた形で、家具に日光の日光彫の技法(彫りの部分だけ)による木彫を行いました。

別荘地として多くの方に愛されている軽井沢だからこそ生まれた、伝統的工芸品と言えます。



技 満開の桜と彫りを浮きだたせる星打ち

軽井沢彫の代表的な彫りは、満開の桜です。日本の象徴であり、多くの方に愛されている桜を丹精込めて彫り込んでいます。

家具などの彫りをより際立たせるため、模様のみまわりに細かな点を打つ「星打ち」を行います。星を打ち込むことにより、彫られた桜がより綺麗に、華やかになっていきます。



歴史・沿革

明治20年頃から外人の別荘が建てられたものの、洋風建築にマッチする家具がありませんでした。そこで、日光彫職人を招いて家具に彫刻をしたところ大変な人気を集めました。

これが軽井沢彫の発祥となります。その後、桜の花を彫りの中にとり入れ、その独創的な製品は、別荘客をはじめ観光客などに好評となりました。



軽井沢彫家具組合

〒389-0102

長野県北佐久郡軽井沢町旧軽井沢775

TEL0267-42-2557 FAX0267-42-2378



信州の伝統的工芸品

秋山木鉢

長野県指定伝統的工芸品 昭和58年10月13日指定



秋山木鉢の概要

秋山郷は信州でも一番の豪雪地帯であり、トチやブナなどの自然林が多く、木工品に必要な材料の入手が容易な環境にあります。江戸時代の末頃から、地元で豊富に産するトチを用いて、うどん、そばを作る際のこね鉢となる木鉢などの生活用品を生産してきました。

製法は、手斧と鉋ちような かんなであら仕上げをし、柄の長いのみで丹念に仕上げていきます。大径木による大型品に特徴があり、手斧や鉋ちような かんなの波紋のような跡が、トチの木の目の模様と光沢に調和して美しく、素朴な味わいを出しています。

【主要産地】

栄村



製造技術

◆荒削り



◆仕上げ削り



【製造工程】



トチの大木から木鉢が

天然の樹齢100年を超えるトチの木が材料となります。大きな木鉢を削り出すためには、大径木でなければできません。

1本のトチからは、20個前後の木鉢を削り出せます。山から木を切り出し、水に漬けた後、荒削りします。



技 ひとつひとつ、手技で削り出し

秋山木鉢は、手斧や鉋を使い、手で削り出しています。ろくろは使わず、手のみで削り出すのです。

木は乾燥すると縮みます。真円に削り出すと変形するため、長年の感と経験から、楕円に削り出しています。



歴史・沿革

鈴木牧之(文政年間)著「北越雪譜」に、秋山郷で木鉢が作られていたことが記載されています。うどん、そばを作るために、こね鉢として用いられました。

手彫りの木鉢は、現在も伝統的な製法で作られ、秋山郷へ訪れる観光客にも好評を得ています。



秋山木工品加工組合

〒949-8321

長野県下水内郡栄村大字堺18165

TEL025-767-2210 FAX025-767-2210



信州の伝統的工芸品

信州竹細工

長野県指定伝統的工芸品 昭和58年10月13日指定



信州竹細工の概要

江戸時代に戸隠の農民により、根曲り竹(ちしま笹)を用いて竹細工が始められ、その後須賀川(山ノ内町)に伝えられたと言われています。

深い雪の中で育つ根曲り竹をナター丁で割り、皮を剥ぎ、編み上げます。当初は農具用として箕、ざるなどが作られ、次第に皿、籠、バッグなどの実用品からインテリア品まで用途

は広がっています。

しなやか(繊維が細い)で復元性が強く素朴感があり、使い込んでいくに従い色合いがよくなり(黄色→鉛色)、手に馴染んできます。

また、伊那市の竹細工は、高遠藩で^{すずたけ}篤竹細工を奨励したことが発祥であり、節の間隔が長いため装飾用として優れています。

【主要産地】

長野市(旧戸隠村)、山ノ内町、伊那市



製造技術

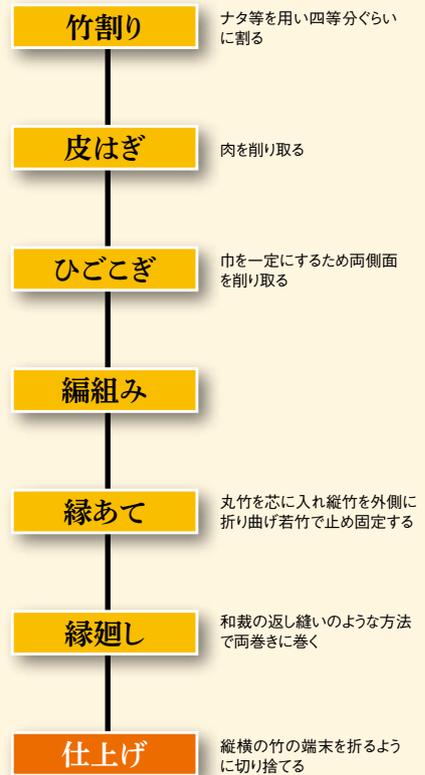
◆竹割り



◆編組み



【製造工程】



しなやかで、丈夫な、根曲り竹

弾力性が強く、しなやかで丈夫なことから、実用品に適している根曲り竹。秋から雪が降る前までに山から刈り取ります。

この根曲り竹を4つに割り、皮をはぎ取ることによって、編むことができる材料を造ります(写真右手)。



技 竹を割り、皮をはぎ、巾を一定に

信州竹細工は、編むための準備が大変です。山から根曲り竹を刈り取るだけでなく、4つに割り、皮をはいでいきます。さらに、竹の巾を一定にするためひごこぎをします。編むための材料を作るまでが一仕事と言えます。



歴史・沿革

慶長7年、幕府の命を受け大久保靉守が巡視した折、徳武利佐衛門の請願により根曲り竹の伐採を許されたことが戸隠村の竹細工の発祥となります。約50年後、戸隠村の徳竹武左衛門ら兄弟が山ノ内町に移り竹細工を広めました。

また、江戸享保年間に、凶作対策の一助として高遠藩が篤竹細工を奨励したことが、伊那市の竹細工の発祥となりました。

信州竹細工の特徴は、ちしま篋(根曲り竹)は弾力性が強いことから、実用品として、また、篤竹は節の間隔が長いことから、装飾用として優れています。



須賀川竹細工振興会

〒381-0402 長野県下高井郡山ノ内町佐野1435-1
TEL0269-33-5359

戸隠中社竹細工生産組合

〒381-4101 長野県長野市戸隠3416
TEL026-254-2181



信州の伝統的工芸品

信州鋸

長野県指定伝統的工芸品 昭和58年10月13日指定



信州鋸の概要

約200年前の江戸時代に、諏訪・高島藩が江戸で鋸鍛冶として知られた藤井甚九郎を招いて鋸の製造を始めたのが起源で、甚九郎は信州鋸の元祖と言われています。

その後、明治時代に茅野市を中心にして、山林用鋸や大工用鋸などの製造が盛んになりました。

鍛造に適した八ヶ岳山麓の気候と豊富に産出する鍛冶用の松炭により発展し、伝統的技術による手造りの鋸は、耐久性や切れ味の良さなど優れた品質において全国に知られています。

【主要産地】 茅野市、原村、 富士見町



製造技術

◆ 研磨



◆ 仕上げ目立て



【製造工程】



切れ味を良くするアサリ出し

鋸でたたき、刃を交互に振り分けます。手の微妙な感覚で、振り分けの具合を変化させると、切れ味が増します。

このアサリ出しは、鋸を使う際に、ぬか出しが良く、刃の通りを良くするためです。



歪みを見つけ出し、抜き取る技

焼入れ、焼き戻しを行った鋼材は、歪みがあります。真っ平らに見えても、切れ味を悪くする歪みが残っています。長年の経験と感でその歪みを見つけ、抜き取り、鋸の板を平らにしていきます。



歴史・沿革

江戸京橋の鋸職人中屋(藤井)甚九郎が高島藩の招請により諏訪へ移居し、鋸製造の普及を図ったことが山田茂保著「諏訪史概説」に記載されています。

明治時代は、山林用鋸が殆どでしたが、現在では大工用鋸が80%を占めています。

茅野市、原村、富士見町では、明治12年頃生産者が580軒余に達していました。



茅野市鋸組合

〒391-0011 長野県茅野市玉川|8375
TEL0266-79-4287 FAX0266-79-6503
URL <http://www.chinocci.or.jp/nokogiri/>



信州の伝統的工芸品

あけび蔓細工

長野県指定伝統的工芸品 昭和59年8月23日



あけび蔓細工の概要

野沢温泉村周辺では、江戸時代の後期から冬期間の副業として、付近の野山に産する「あけび」の蔓を使用して玩具や籠などの日用雑貨が造られてきました。

あけび蔓は弾力性に富み丈夫であり、自然そのままの風合いを生かして茶赤色表皮をつけたまま編む「赤棒」と、表皮を温泉で剥いだ

「製白蔓」の2種類があります。

美しさと堅牢さを兼ね備え、郷土玩具の鳩車や買物籠など実用品として広く愛好されており、使い込んで年月が経つほど味わい深くなります。

【主要産地】

野沢温泉村ほか



◆あけび蔓



◆編組み



【製造工程】



おがま 麻釜であけび蔓を熱湯処理

野沢温泉村のシンボル「麻釜」。野菜や卵を茹でたりもします。その麻釜に、あけび蔓を浸します。食べ物用とは異なる専用の温泉です。春から秋にかけて成長した蔓を、10月から11月に採取したものを使います。



技 細いあけび蔓を2つに裂いて

籠の手持ち部分の製作は、手と口で微妙な加減を調整し、細いあけび蔓を2つに裂きます。2つに裂いた蔓を、さらに面取りをして、手持ち部分を巻く蔓ができあがります。



歴史・沿革

あけび蔓細工の発祥は、天保年代(1830年)といわれています。池田善右衛門という村人があけび蔓を麻釜に浸し、これをさらに清流に浸してから皮をはいたところ非常にきれいで柔軟な蔓になりました。この蔓を用い簡単な玩具や籠を作ったところ、湯治客は珍しがって買い求めました。以後、村民は徐々に副業化していきました。



長野県あけび蔓工芸組合

〒389-2502
長野県下高井郡野沢温泉村大字豊郷4371-5
TEL0269-85-2236 FAX0269-85-3174



信州の伝統的工芸品

信州手描友禅

長野県指定伝統的工芸品 昭和61年2月20日



信州手描友禅の概要

信州の手描模様染色は、江戸時代の初期から松代、上田、松本、高遠、飯田など県下の城下町を中心に発達しており、各地で京都の友禅師を招くなどにより技術を確認し、長い年月を経て、信州手描友禅として形成されてきました。

「友禅」は絹織物に手描きで繊細な模様を染め込む染色方法で、華やかで格調の高い

着物に使われており、筆や刷毛を使い、丹念に色を挿していくには熟練の技術力と感性が求められます。

信州手描友禅は、草や木の樹皮などから煮出した天然の染料で描く、全国でも特に稀な、草木染友禅の技法を取り入れており、草木染ならではの色の優しさと信州の自然を感じさせる豊かさがああります。

【主要産地】

長野市、上田市、
松本市、伊那市、
駒ヶ根市、飯田市 ほか



◆糸目糊置き



◆友禅さし



【製造工程】



染料に対する深い知識と熟練の技

信州手描友禅では、様々な筆や刷毛を使い、色を挿していきます。

染料の特質を考え、色合わせと全体の色の調和を整えながら作業します。

染料に対する深い知識と熟練の技は、華やかな着物や帯などを生み出しています。



技 信州の自然から採取した草木が原料

ススキ、梅、あんず、きはだなど、信州の山野には、草木染の原料となる草木がたくさんあります。

自然から生まれるその色は、色彩が豊富で美しく、絵付け試験研究を積み重ねて開発された友禅技法は、色あせしにくいと高い評価を得ています。



歴史・沿革

手描模様染色は、江戸時代初期(元和年代)から県内の城下町を中心に武士階層を対象として発達しました。

明治時代に入ると、衣服の庶民化により需要が拡大され、県内各地で京都の友禅師を招く等して友禅染が盛んになり、手描友禅の技術が確立されました。近年、洋服の普及により需要は減少しているものの日本人にとってなくてはならないものとなっています。

また、独特な草木染の技法を取入れた草木染友禅は、色彩の豊富さと色の柔らかさ、奥深さ、味わい深い色合い、堅牢度の高さ、色あせが少ないこと等、格調の高いものと高く評価されています。

長野県手描友禅染匠組合

〒380-0802 長野県長野市上松1-1-6

TEL026-233-1972 FAX026-233-5776



信州の伝統的工芸品 飯田水引

長野県指定伝統的工芸品 平成26年11月27日



飯田水引の概要

元禄時代(1700年頃)に飯田地方で盛んとなった元結製造の原紙を用いて、生水引が作られたのが始まりと言われています。明治時代以降、元結の需要が減少する中で、その技術を生かした紅白水引等の生産が拡大しました。

昭和20～30年代には、金封、結納品飾りや鶴亀、松竹梅など立体的製品が造られるよ

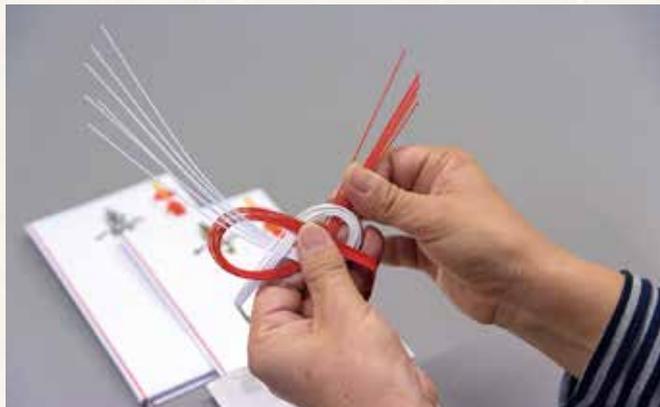
うになり、水引の結び、細工、組立の多様化・高度化が進みました。現在では、飯田地方の全国シェアは約70%となっています。

飯田水引は、日本古来の伝統的風習に用いられ、多彩で独創的なデザインが可能です。暮らしの中で「贈る心」、「おもてなしの心」を表現するために欠かせないものとなっています。

【主要産地】 飯田市ほか



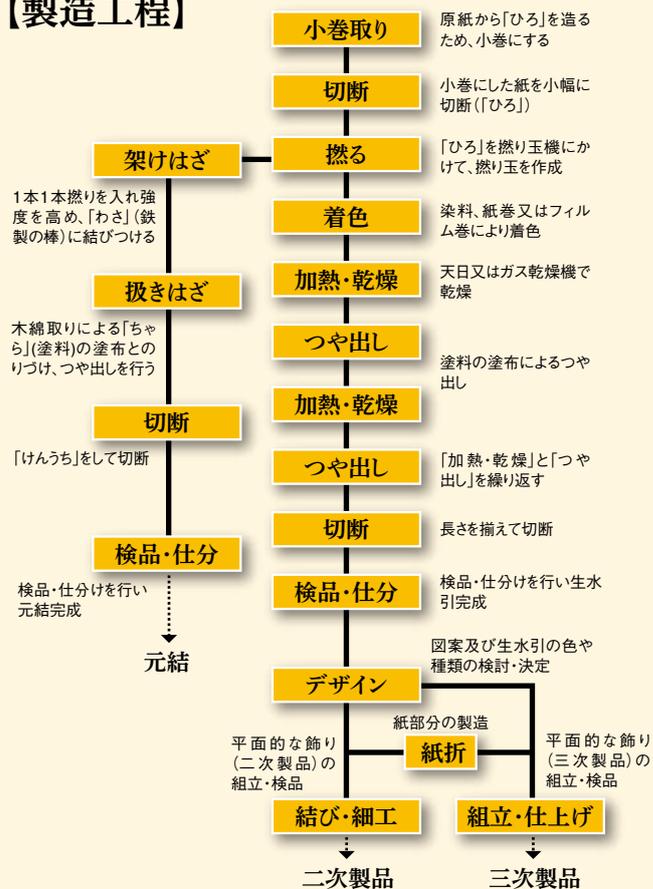
◆結び・細工(二次製品)



◆結び・細工(三次製品)



【製造工程】



水引の装飾品が議長席後方の壁に

飯田市議会の議場には、大きな水引の装飾品が設置されています。淡路結びで、縦1.4m、横1.6mの大きさとなります。

「人と人を結ぶ・心と心を結ぶ・飯田水引」と言われるように、人と人の縁を結ぶなど、結び思いが水引には込められています。

この五色は、古代中国の陰陽五行説に由来します。すべてのものは、木・火・土・金・水の5つの要素から作られている、森羅万象であるとの考えです。この5つの要素を5つの色に置き換えています。この五色により、魔が忍び寄っても「万物を成す五つの元素」が邪気を祓い、守ってくれると言われていました。



技 元結から発展して、金封、立体的製品へ

飯田は、強く丈夫な和紙の産地でした。江戸時代には、その丈夫な和紙で「元結」が造られ、江戸や多くの地域へ移出されました。現在も、大相撲力士のまげは、飯田の元結が使われています。

明治に入り、断髪令により、元結の需要が激減する中、その生産技術に改良を加え、光沢のある丈夫な水引を作り出すことに成功しました。

その後、水引の様々な結び方が開発され、水引の用途も金封や結納品から、立体的な三次製品へと広がってきました。



歴史・沿革

元禄時代(1700年頃)から元結原紙の一部を原料として、紅白生水引が飯田地方の名護熊村などで製造されたことが始まりと言われています。

明治維新以降、儀式文化の向上にも支えられ、生水引の需要は増え、昭和6年には紅白・黒白水引の全国シェア50%を占める一大産地となりました。

昭和27年頃から、生水引(一次製品)を東京等へ納品するようになり、結納品や金封などの細工物も製造するようになりました。

昭和30年代には、結び方や細工に創意工夫がなされるようになり、鶴亀、松竹梅など多様な立体的製品(三次製品)が製造されるようになりました。

飯田水引協同組合

〒395-0001
 長野県飯田市座光寺3349-1
 TEL0265-22-3363 FAX0265-22-3369
 e-mail iidamizuhiki@zb.wakwak.com
 URL <http://iidamizuhiki.jp/>



信州の伝統的工芸品

松代焼

長野県指定伝統的工芸品 平成26年11月27日



松代焼の概要

約200年前の江戸時代後期に、松代藩の奨励により松代地域を中心に盛んに生産され、その後昭和初期に全てが廃窯となりましたが、昭和40年代に復興を遂げました。

陶土には鉄分の多い地元の粘土等を使用し、灰、白土など天然素材で調合した釉薬を二重掛けすることで、素朴な造形・風合いと独特な青緑色の光沢を出しています。口元に付

けた釉薬が窯の中で溶け出し、流れ落ちる「青流し」も施され、形は同じでも色合いは全て異なります。

北信地域を代表する焼物として、日常生活で使いやすい食器や花瓶など幅広い製品を生産しています。

【主要産地】 長野市



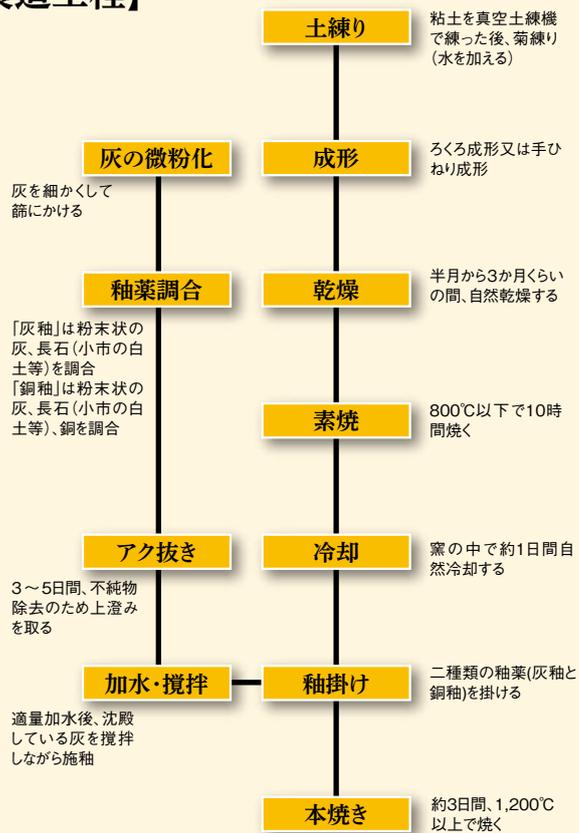
◆成形



◆釉掛け



【製造工程】



素朴な風合いと独特の青緑色の光沢

松代焼の特徴のひとつ「青流し」。灰釉を掛けた後、口元に少し銅釉をつけると、窯の中で溶け出し流れ落ちてきます。

この流れは、製造者にも予想できません。形は同じでも、青流しの流れがひとつひとつ異なります。



歴史・沿革

1795年頃、唐津の地で陶芸を修行した嘉平治(陶工)が、窯を築いたのが始まりとされています。

1816年頃、真田藩主・真田幸専が産業振興のため藩窯として奨励し、江州信楽や常滑から陶工を招いて生産させました。また、民窯も盛んとなり、日常雑器などが一般家庭に普及しました。

その後、交通網の整備にともない、他産地からの安価な製品が流入し、松代焼は次第に衰退し、昭和初期には全てが廃窯となりました。

昭和40年前後、長野の文化、松代焼の窯の火をもう一度と、窯跡の発掘調査やかつての事業者への聞き取り、小窯での研究など、復興に向けた取組が始まりました。昭和47年には新しい窯が見つられ、本格的な復興を遂げ、今日に至ります。

技 天然素材から生まれた釉薬

松代焼の釉薬は、天然素材である灰類(木灰・わら灰・もみがら灰)、長石(小市の白土等)などを調合することによって造られます。

釉掛けは二重掛けにしており、釉薬の掛け加減や季節・気候などによって、その色も変化します。独特の青緑色は、こうして生まれてきます。



松代焼作陶会

〒381-1233 長野県長野市松代町清野2120
TEL026-278-7302 FAX026-278-5143



信州の伝統的工芸品

栄村つぐら

長野県指定伝統的工芸品 平成26年11月27日



栄村つぐらの概要

栄村では明治時代に稲作が始まると、冬期に、子守のための「ぼぼつぐら」が稲わらで作られるようになり、昭和初期には小型の「猫つぐら」が多くのご家庭で使われていたと言われています。

乾燥させた稲わらを切り揃え、叩いて柔らかくし、底編み、胴編みや三つ編みの縁造りなどの伝統技術により造り上げます。

天然の稲わらの暖かさを活かし、手作業で丁寧に編み込む「猫つぐら」は、ペットブームと相まって需要が増大しており、栄村の稲作文化として、稲わらの叩き方や各工程の編み方などの技術伝承と更なる品質向上に取り組んでいます。

【主要産地】 栄村



製造技術

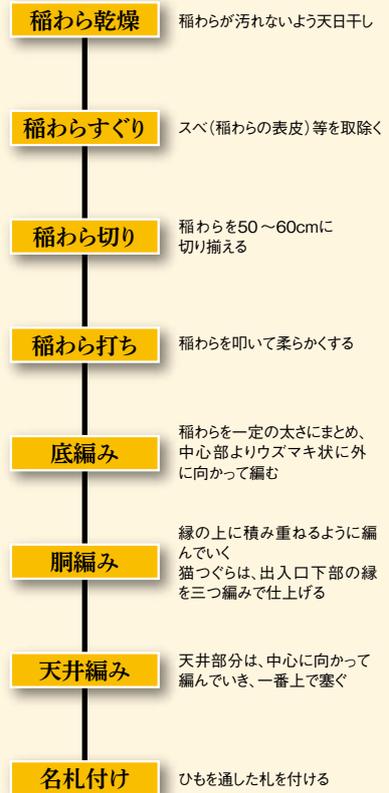
◆稲わら打ち



◆底編み



【猫つぐら製造工程】



「猫つぐら」の製作技術伝承

つぐらの製作技術を伝承するため講習会を開催しています。つぐらの良さを知ってもらうため、栄村の造り手が、丁寧に教えています。

わらの叩き方からつぐらの編み方まで、ひとつひとつ教わっていくと、つぐらが完成していきます。



技 稲わらの暖かさはずっと続く

丁寧に、心を込めて編んだつぐらは、稲わらの暖かさがあります。60年以上前に造られた「ぼぼつぐら」も、鉛色に変わっていますが、現在でも残っています。子どもをあやしたことから少し変形していますが、その暖かさが今でも伝わってきます。



歴史・沿革

文政11年(1828年)、文人の鈴木牧之が執筆した「秋山紀行」の秋山民家之図に、木製の「つぐら」が紹介されています。

明治以降、栄村でも稲作が始まり、冬場の収入を得るため、わら細工による「わら草履」等の製品が盛んに造られるようになり、同時に自家用として乳幼児を入れる「ぼぼつぐら」が作られ、これが栄村での稲わらによる「つぐら」の始まりと言われています。

栄村青倉地区の住民によると、昭和初期には、小型の「猫つぐら」がほとんどの家庭にあったと言われています。また、当時子どもをあやした「ぼぼつぐら」も現存しています。

代替品の普及で次第に生産が減少したものの、昭和61年、栄村振興公社の発足を契機に、「つぐら」の振興に取り組み、「飯つぐら」や、現在の形状となる「猫つぐら」が造られるようになりました。



栄村つぐら振興会

〒389-2703

長野県下水内郡栄村大字堺9214-1

TEL0269-87-2100 FAX0269-87-2100



信州の伝統的工芸品

信州からまつ家具

長野県指定伝統的工芸品 平成26年11月27日



信州からまつ家具の概要

昭和34年頃から、長野県工業試験場におけるカラマツ材の脱脂・加工技術の研究成果をもとに、長野県家具工業会によるからまつ家具の製造が始まりました。

昭和44年に「からまつ家具研究会」が発足し、官民一体でカラマツの特徴に応じた部材加工、塗装、組立など製造技術の向上に取

り組みました。平成16年には「針葉樹家具開発研究会」が設立され発展してきました。

木目が明瞭で美しく、柔らかい風合いを持つ長野県産カラマツ材を用いて、「ほぞ」、「ダボ」等の部材接合や面取り、表面の研削・研磨などの加工技術により、様々な箱物家具、脚物家具を製造しています。

【主要産地】

松本市、安曇野市、
長野市、小諸市、
伊那市、千曲市、
朝日村

製造技術

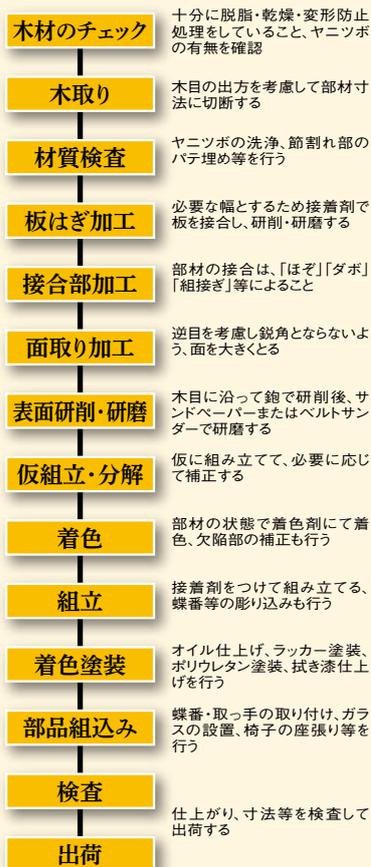
◆ほぞ接合



◆表面研磨



【製造工程】



ナチュラルでソフトな風合いと優しい接触感

カラマツの無垢材は、木目が明瞭で、とてもきれいです。ナチュラルでソフトな風合いは、多くの方に喜ばれています。

材質は柔らかく、キズが付きやすいのですが、その柔らかさが、独特の風合いと接触感の優しさを生み出しています。



歴史・沿革

昭和34年頃から、長野県家具工業会が、長野県工業試験場の研究成果や支援のもと、からまつ家具の製造を奨励したことが始まりと言われています。

長野県工業試験場は、昭和28年頃から、カラマツ材の利用促進のため脱脂技術、加工技術、試作開発の研究に取り組み、昭和34年11月、東京で「新製品信州からまつ家具展示求評会」を行い、全国の家具業界から注目され、一部で都内の有力問屋との取引が進みました。

昭和44年には、「からまつ家具研究会」が発足し、官民一体となってからまつ家具の品質向上、普及に取り組みました。

平成9年以降、からまつ家具は学童用家具等の公共施設向けを中心として急速に普及しました。平成16年には、カラマツに加え、スギやアカマツ等の用材による家具の新商品開発・普及を目的に、「針葉樹家具開発研究会」が発足し、今に至ります。

技 国産の針葉樹、カラマツの家具

日本で造られている家具のほとんどは広葉樹やその合板が使われる一方、植林される大半が針葉樹となります。地域の木材を使い、自然環境に優しい家具を造ることは重要なことです。

針葉樹の中でも活用が難しいとされたカラマツ材を、50年以上の研究から、「信州からまつ家具」として全国へ展開しています。



針葉樹家具開発研究会

〒390-0828

長野県松本市庄内2-2-9 (有)柳澤木工所内

TEL0263-25-0293 FAX0263-27-2513



信州の伝統的工芸品

小沼箒

長野県指定伝統的工芸品 平成31年3月22日指定



小沼箒の概要

明治初年からほうきの生産が行われていました。

豪雪地帯である飯山市では、冬期間の副業として盛んになりました。

昭和20年(1945)代から30年(1955)代に最盛期となり、ひと冬に3万本以上を生産していました。しかし、住宅様式の変化や電化製品の普及により、生産量は著しく減

少しました。

現在は、平成30年(2018年)に発足した「小沼ほうきを守る会」が小沼ほうき振興会と名称変更して、積極的に生産と販売を進めています。

スキー場のリフトや旅館などで愛用されているとともに、学校の授業でも取り入れられ、地域ぐるみで生産と販売を進めています。

【主要産地】

飯山市



製造技術

◆玉つくり



◆寄せ・編み込み



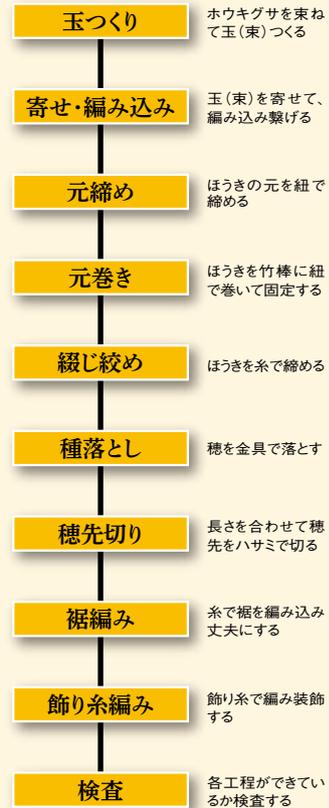
◆元巻き



◆穂先切り



【製造工程】



技 見えないところを丁寧に

小沼箒の原材料は、地元で生産しているほうきグサです。刈り込みをした後、乾燥させることにより、良質なほうきが生産できます。

幅のあるほうきの場合、寄せ・編み込みの際に、かんざし(竹の棒)を横向きに刺すことにより、掃きやすく長持ちするほうきができていきます。見えないところも、丁寧にきっちりと生産している小沼箒です。



小沼ほうき振興会

〒389-2414 長野県飯山市大字常盤5799
TEL0269-62-0274



信州の伝統的工芸品

長野県手作り打上花火

長野県指定伝統的工芸品 平成31年3月22日指定



長野県手作り打上花火の概要

約300年前の江戸時代に、飯田市で奉納花火が始まり、この頃から県内の神社の祭事に合わせ奉納花火が行われるようになりました。

昭和初期、長野市の青木儀作氏が煙火玉に芯入を二重にした八重芯菊花火を国内で初めて開発・完成させ、長野県独自の煙火と

して、全国的に有名になりました。

長野冬季五輪大会閉会式では、長野県花火組合により花火打上げを行いました。現在も、県内各地で多くの花火大会が催され、手作りの打ち上げ花火が上げられています。

【主要産地】
長野県全域



製造技術

◆星掛作業



◆星の乾燥



◆玉込作業



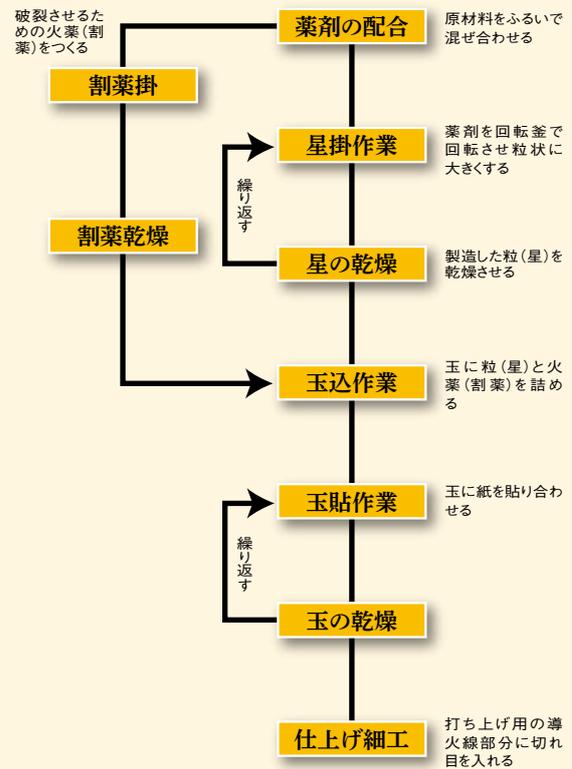
歴史・沿革

長野県手作り打上花火のルーツは、武田信玄が連絡用の狼煙網を完備したことだと伝承されています。長野県における火薬の文化は、1581年、織田信長が伊那谷を攻め入る際に狼煙を使用したのが始まりといわれています。

その後、1712年に飯田市今宮郊戸神社で奉納花火が始まり、この頃から県内の神社の祭事に奉納花火が催されることとなりました。北信地域では1824年、長野市安茂里の犀川神社で奉納花火が始まりました。

現在も、江戸時代から使用している硝酸カリウム、松灰、麻灰や、第二次大戦後から使用している過塩素酸カリウムも原材料として、手作りで打ち上げ花火を製造しています。

【製造工程】



技 八重芯菊花型花火

昭和3年頃、長野市の青木儀作により八重芯菊花型花火が、国内で初めて開発、完成されました。

親星の内側に二重の芯を持つことにより、三重の花火を実現しました。

開発当初は、今までに無い華やかさでこれ以上のものは無いという意味を込めて「八重」と名付けられたといわれています。

一番中心にあるものを中芯、その次のものを外芯、一番外側は親星となり、色の変化、美しさを楽しむことができます。



長野県花火組合(事務局)

〒389-0505 長野県東御市和2939

TEL 0268-62-3878 FAX 0268-62-0131



信州の伝統的工芸品

信州組子細工

長野県指定伝統的工芸品 平成31年3月22日指定



信州組子細工の概要

組子細工は、江戸時代以前より神社、仏閣、城等に使用されてきました。長野県では、明治以降、建具業が専門化し、旅館、料亭、一般家庭等の障子や欄間、衝立などで使用されるようになりました。

昭和36年(1961年)には、長野県木工振興協会の中に、建具部会が設立されまし

た。さらに、昭和46年(1971年)には長野県建具協同組合が設立され、組子の技術の継承、発展に尽力しています。

近年、住宅様式が変化しているものの、障子や襖、欄間等の内装用木製建具を手掛ける職人が多く残り、組子細工の技術を活かしています。

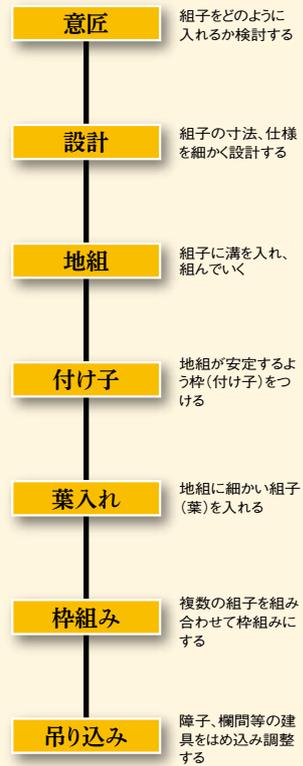
【主要産地】 長野県全域



◆葉入れ



【製造工程】



技 木の特性を活かして組み上げる

組子細工とは、その名前の通り、釘や接着剤などを一切使わず、手作業で、木を組み合わせ、美しい模様を創り出す伝統的な技術です。

木の特性を理解し、どのように組み上げると、美しくきれいに仕上がるかを考え、一つひとつを手作業で進めていきます。

組み合わせの部分に特殊な鉋(溝鉋)を用いて溝を削り、さらに、組手の重なる部分に溝を入れます。それぞれの組手を製作

し、手作業で組子を組んでいきます。

組み合わせた組子は、付け子で周りを囲みます。付け子は、留接合し、組子がひとつとなります。

付け子で囲まれた地組、葉と呼ばれる部材を入れていきます。

木の特性を理解し、全体の意匠をイメージしながら、一つひとつの細かな製作を進めていくことにより、ひとつの組子細工が完成することができます。



長野県建具協同組合

〒381-0034 長野市大字高田久保沖1172番地9
TEL026-228-7666



伝統的工芸品産地一覧

木曾漆器	木曾漆器工業協同組合	〒399-6302 長野県塩尻市木曾平沢2272-7	TEL.0264-34-2113 FAX.0264-34-2820
信州紬	長野県織物工業組合	〒399-4106 長野県駒ヶ根市東町2-29 久保田織染工業(株)内	TEL.0265-83-2202 FAX.0265-83-2204
飯山仏壇	飯山仏壇事業協同組合	〒389-2253 長野県飯山市大字飯山1436-1 飯山市伝統産業会館内	TEL.0269-62-4026 FAX.0269-62-4019
松本家具	松本家具工芸協同組合	〒390-0811 長野県松本市中央4-7-5	TEL.0263-36-1597 FAX.0263-32-3802
内山紙	内山紙協同組合	〒389-2322 長野県飯山市大字瑞穂6385	TEL.0269-65-2511 FAX.0269-65-2601
南木曾ろくろ細工	南木曾ろくろ工芸協同組合	〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻4689	TEL.0264-58-2434 FAX.0264-58-2434
信州打刃物	信州打刃物工業協同組合	〒389-1312 長野県上水内郡信濃町富濃584-1	TEL.026-255-6391 FAX.026-255-6391
曲物	奈良井曲物組合	〒399-6303 長野県塩尻市大字奈良井1352	TEL.0264-34-3406 FAX.0264-34-3406
蘭絵笠	蘭絵笠生産協同組合	〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻3321-1	TEL.0264-58-2664 FAX.0264-58-2664
お六櫛	木祖村お六櫛組合	〒399-6201 長野県木曾郡木祖村藪原1260-1	TEL.0264-36-2488 FAX.0264-36-2488
木曾材木工芸品	木曾木材工業協同組合	〒399-5608 長野県木曾郡上松町荻原1579-3	TEL.0264-52-5500 FAX.0264-52-5501
長野県農民美術	長野県農民美術連合会	〒386-0005 長野県上田市古里114-18	TEL.0268-24-2304 FAX.0268-24-2304
軽井沢彫	軽井沢彫家具組合	〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町旧軽井沢775	TEL.0267-42-2557 FAX.0267-42-2378
秋山木鉢	秋山木工品加工組合	〒949-8321 長野県下水内郡栄村大字塚18165	TEL.025-767-2210 FAX.025-767-2210
信州竹細工	須賀川竹細工振興会	〒381-0402 長野県下高井郡山ノ内町佐野1435-1	TEL.0269-33-5359
	戸隠中社竹細工生産組合	〒381-4101 長野県長野市戸隠3416	TEL.026-254-2181
信州鋸	茅野市鋸組合	〒391-0011 長野県茅野市玉川8375	TEL.0266-79-4287 FAX.0266-79-6503
あけび蔓細工	長野県あけび蔓工芸組合	〒389-2502 長野県下高井郡野沢温泉村大字豊郷4371-5	TEL.0269-85-2236 FAX.0269-85-3174
信州手描友禅	長野県手描友禅染匠組合	〒380-0802 長野県長野市上松1-1-6	TEL.026-233-1972 FAX.026-233-5776
飯田水引	飯田水引協同組合	〒395-0001 長野県飯田市座光寺3349-1	TEL.0265-22-3363 FAX.0265-22-3369
松代焼	松代焼作陶会	〒381-1233 長野県長野市松代町清野2120	TEL.026-278-7302 FAX.026-278-5143
栄村つぐら	栄村つぐら振興会	〒389-2703 長野県下水内郡栄村大字塚9214-1	TEL.0269-87-2100 FAX.0269-87-2100
信州からまつ家具	針葉樹家具開発研究会	〒390-0828 長野県松本市庄内2-2-9 (有)柳澤木工所内	TEL.0263-25-0293 FAX.0263-27-2513
小沼箒	小沼ほうき振興会	〒389-2414 長野県飯山市大字常盤5799	TEL.0269-62-0274
長野県手作り打上花火	長野県花火組合(事務局)	〒389-0505 長野県東御市和2939	TEL.0268-62-3878 FAX.0268-62-0131
信州組子細工	長野県建具協同組合	〒381-0034 長野市大字高田久保沖1172番地9	TEL.026-228-7666

信州の伝統的工芸品マップ

NAGANO's Traditional Crafts Map





しあわせ信州

NAGANO's Traditional Crafts
信州の伝統的工芸品
現代に生きる伝統の技と心

令和3年1月1日発行

長野県産業労働部

お問い合わせ先

長野県産業労働部産業技術課

TEL.026-235-7132